1676年のイスファハーン

——都市景観復元の試み——

羽田　正

はじめに

研究対象として歴史上の都市をどのような観点から扱うにしても，基本的な手続きとしてまず，その都市の地誌を出来るだけ正確に把握しておくことが必要であろう。その際，19世紀以後の地誌であれば，当該都市の現在のプランからある程度の推測が可能であるとともに，良質の都市図が残されており，参考に出来る場合も少なくない。しかし，時代をさかのぼればさかのぼるほど，この種の作業は困難になってくる。景観が大きく変化してしまう上に，史料が不足する場合が多くなってくるからである。広義のイラン文化圏に属する都市の地誌研究も例外ではない。19世紀には，ヨーロッパ人によって，テヘラン，イスファハーンなどいくつかの町の都市図が記された。いわゆる近代化以前の都市の姿は，部分的にではあるが，イラン人によっても図として書き残されている。19世紀から今世紀に書かれた地方誌史料も多い。これらを用いた地誌研究は，決して大量ではないが，それなりの数の成果を生み出してきた。我が国でも，坂本勉氏によるイスファハーンのトポグラフィー研究が行なわれている(1)。

これに対して，18世紀以前のいわゆる前近代都市の地誌研究は，11-12世紀のニーシャープール，15世紀ティームール朝時代のヘラート，17世紀サファヴィー朝時代のイスファハーンを除くと，あまり活発とは言いがたい(2)。現地調

査の困難，正確で信頼に足る地図の不足，それにペルシア語史料の欠如という悪条件の下ではやむをえない結果かもしれない。研究が比較的進んでいるこの3つの都市についても，ヘラートに関するAllenの研究[3]は，文献史料と現地調査を組み合わせた網羅的，意欲的なものであるが，これを除けば他の2つの都市の地誌はまだ部分的に明らかにされているにすぎない。また，地誌がある程度明らかになるとそれを分析して，その都市，地域，時代の特徴を見いだす試みがなされねばならないが，これもまだ十分に行なわれているとは言えない。本稿は，このようなこれまでの研究状況を踏まえたうえで，サファヴィー朝の首都であった17世紀後半，より正確には1676年前後のイスファハーンの地誌を検討することを第一の目的とする。それによって従来のこの町に関する地誌研究を補い，若干の新知見を付け加えたい。そしてこれを材料に，当時の王朝権力と都市社会の関わりについて考えてみたい。これが，同じイラン文化圏の諸都市，アラブ，トルコなど周辺文化圏の諸都市との比較のための一つの材料となれば幸いである。

1. イスファハーン地誌研究のための史資料

地誌研究のための史料が不足しがちな前近代都市のなかでは例外的に，17世紀後半のイスファハーンは史料に恵まれている。本論に先立って，利用できる史資料を簡単に解説しておこう。

(1) *Voyage du Chevalier Chardin en Perse*, (ed.) L. Langlès, 10 vols. Paris, 1811. (以下 Chardin と略記)

新教徒フランス人の宝石商人で旅行家の Chardin の旅行記は，17世紀イスファハーン地誌研究の一等史料である。最良の版本と言われる Langlès の校訂本では，Ⅶ巻からⅧ巻にかけての約350頁が，Description particulière de la ville d'Ispahan, capitale de Perse として，特にイスファハーンを描写

表 1　Chardin 年譜

1643. 11. 16	誕生。父 Daniel, 母 Jeanne。父はパリ Place Dauphine の宝石商人。父は，有名な宝石商 J. B. Tavernier とも取引を行なう。
1665	友人 A. Raisin とともにオリエントへの旅に出る。
1666初め	イスファハーン着。アッバース2世から旅券，免税特権，Marchand du roi の称号を与えられる。
1667末	インドへ。Bandar-e 'Abbās で Tavernier と，Surate で F. Bernier と出会う。
1669	ペルシアへ戻る。
1670. 5	パリへ戻る。サファヴィー朝ソレイマーンの即位とその2年間の統治についての書を翻訳して出版。
1671. 11	イタリアから船で再び東方へ。
1672. 3	イスタンブル着。黒海，コーカサスを経てペルシアへ。
1673. 6	イスファハーン着。カプチン派修道院に逗留。
1674. 2	イスファハーン発。ペルセポリス見学。Bandar-e 'Abbās へ。インドへ向かおうとするが果たせず，引き返す。
1674. 7	イスファハーン着。以後1677年までペルシアに滞在。
1678	インドへ渡る。
1679. 11	Surate から船で直接欧州へ向かう。
1680. 8. 27	ロンドン着。その後パリへ戻る。
1681. 4	ロンドンへ居を移す。Royal Academy の会員に選出される。結婚。夫人はルーアンのユグノー商人の娘。以後ロンドンを拠点として商売や慈善活動を行なう。
1686	パリーイスファハーン間の2回目の旅行の旅行記を出版。
1711	『ペルシアについての記述』アムステルダムで出版。
1713. 1. 9	没（69歳）。子7人。

するために割かれている。Chardin の略歴については表1を参照戴きたいが[4]，当時のペルシアを2度訪れ，イスファハーンには1666-67年，1673-77年の間に約5年半滞在している。彼自身の語るところによると，彼はこの『イスファハーン誌』を書くにあたって，2人のモッラー（イスラム宗教学者）に依頼して，町の街区名，道路名，主要建築物名，建築者名などを記させ，それを持ってオランダ人の友人と手分けして町をくまなく歩き，現地で確認した上で記録

として残したという。そして，最終的に1676年に彼自身が現地を再確認し，あまりに大部になった記録を現在に伝わる状態にまで縮めたという[5]。描写は，大きく市内と郊外の二部に分かれ，双方ともにほぼ地区ごとの主要建造物とそれにまつわる話が中心となって構成されている。一部叙述が理解しにくいところはあるものの，筆者が他の史資料とあわせて読むかぎり，当時の記録としては極めて正確で信頼に値する。ペルシア語史料からはほとんど知ることの出来ない具体的な町の姿（主要人物の邸やバーザールの位置），町の人々の生き生きとした暮らしぶり（人々の間に伝わる迷信や伝説が記録され，阿片宿や売春宿，男娼などについても冷静に興味深く記されている）が詳細に報告され，読む者を飽きさせない魅力に満ちている。もしこの記録が残されていなければ，当時のイスファハーンの地誌を再構成することはほとんど不可能だと断言できる。本稿では，1811年版を底本として利用するが，1711年の初版をも随時参照した[6]。

(2) L. Honarfar, *Ganǧīne-ye āṯār-e tārīxī-ye Eṣfahān*, Esfahan, 1344.（以下 Honarfar と略記）

イスファハーンに現存する主な宗教施設を調査し，その壁面などに記された建築者の名や建築の由来，ワクフ文書，王や政治権力者の命令書などを校訂して出版した貴重な史料集。

(3) A. Mehrābādī, *Āṯār-e mellī-ye Eṣfahān*, Tehran, 1352.（以下 Mehrābādī と略記）

文献史料を渉猟し，街区名，道路名，モスク，マドラサ，ミナレット，イマームザーデ，キャラヴァンサライ，バーザール，庭園などの都市施設名を現存するものとしないものに整理してその各々に解説を付した便利な書。Chardin など欧文文献にはやや弱いが，一種の地名百科事典として利用できる。

(4) H. Gaube & E. Wirth, *Der Bazar von Isfahan*, Wiesbaden, 1978.

本書は，元来 TAVO のイスファハーン，大バーザール地図の解説として準備されたものだが，単にその域にとどまらず，イスファハーンの歴史地理全般に関して数々の新しい提言を行なっている本格的な研究書である。精力的な現地調査と文献資料に基づいて，イスファハーン大バーザール地区の成り立ち，個々の建造物の由来や建築史的特徴が明らかにされている。付された5葉の地図もきわめて有用である。著者たちの調査が全市に亘って行なわれたのではないこと，現状の調査であるため，かつて当該地域に存在したはずの歴史的な建築物（特に個人の館）に関する言及が少ないことが惜しまれるが，これは調査目的から考えても望蜀の言というべきだろう。

(5) 地図類

a. P. Coste の古地図（1850年前後作成）

b. 1923/24年の古地図（Seyyed Reḍāxān 作成）

c. TAVO, B-Ⅶ-14.5, Beispiele Islamischer Stadte. Das Safavidische Isfahan, 1989.

aとbについては，坂本氏の論考の中に簡にして要を得た紹介があるので参考にされたい[7]。bの地図は最近テヘランの Sahāb 社から復刻出版され，容易に利用できるようになった（Naqše-ye šahr-e Eṣfahān）。レザーシャーの都市近代化政策によって市街を縦貫する広い自動車道路が作られる以前の地図であり，サファヴィー朝以来のイスファハーンの町の姿を伝える貴重な図である。本稿では，この地図から建築物の印や地名，建物名などを記した文字を除き，白地図化したものを説明のために使用する（図4・5）。cの地図は，(4)の *Der Bazar von Isfahan* の著者の一人 Gaube が作成した現在のところ最も詳しく質の高い歴史地図である。見やすく役に立つ地図を目指して様々な工夫がされている。とりわけ，主要建造物が建築年代によって色を変えて示されている点は参考になる。Chardin の記述も取り入れられているが，街区の名称や位置は筆者の見解とは異なっている場合もある。また，個人の邸宅は，そのはっ

きりした位置が不明なためか，図の上にはほとんど記入されていない。

本稿ではこれらを主要史資料として，イスファハーンの地誌を再構成して行くが，とりわけ Chardin の記述を重視したい。何よりも詳細な同時代史料として貴重である上，イスファハーンという都市の全体像を把握するためには，この町を総合的に描写している彼の筆に頼らねばならない部分があまりに多いからである。キリスト教徒としてイスラム社会への予断と偏見が全くないというわけではないが，当時のヨーロッパ人としてはきわめて冷静に，かつむしろ好意的に，彼の目に映ったペルシアを描ききっている。本稿のタイトルを「1676年のイスファハーン」とした所以である。

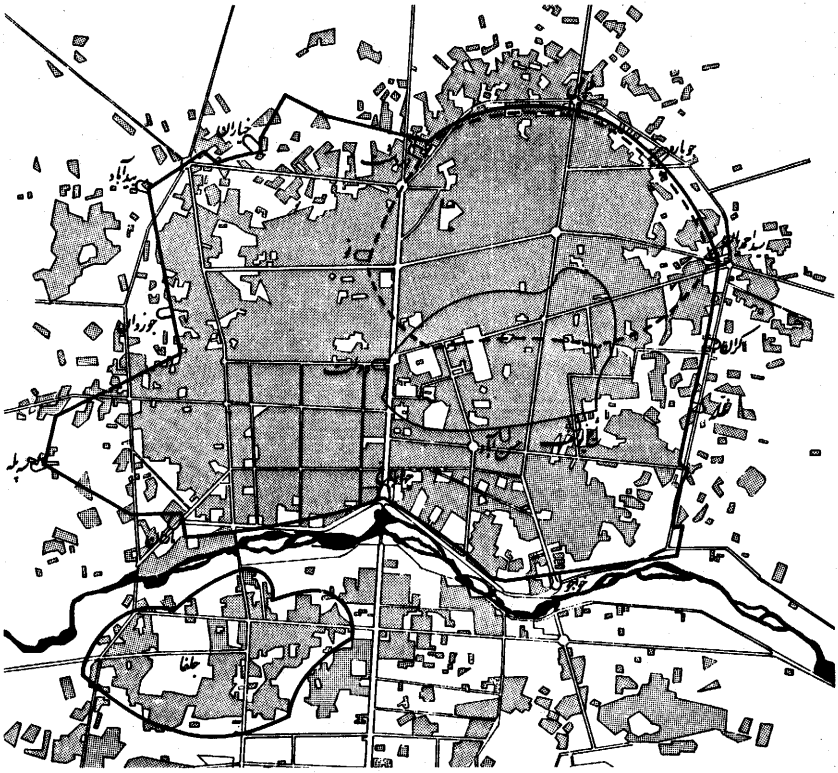
2. 市壁，市域，市門

前近代の都市のトポグラフィーを考える際には，市壁の有無がしばしば問題になる。中国の場合のように，単なる防御施設である以上に，そこに象徴的な意味が込められていることが多いからである。ここでも，まず17世紀後半の市壁についての検討から始めることにしよう。それによって市域をある程度確定することも可能になるだろう。市壁について Chardin は次のように記している。

> イスファハーンの町の壁は，周囲およそ2万歩である。土で作られ，あまり良く手入れされていない。また，壁の内でも外でも多くの家々や果樹園が接しているため，いくつかの場合では良く探さないと確認出来ないほどである。(Ⅶ，p. 284)

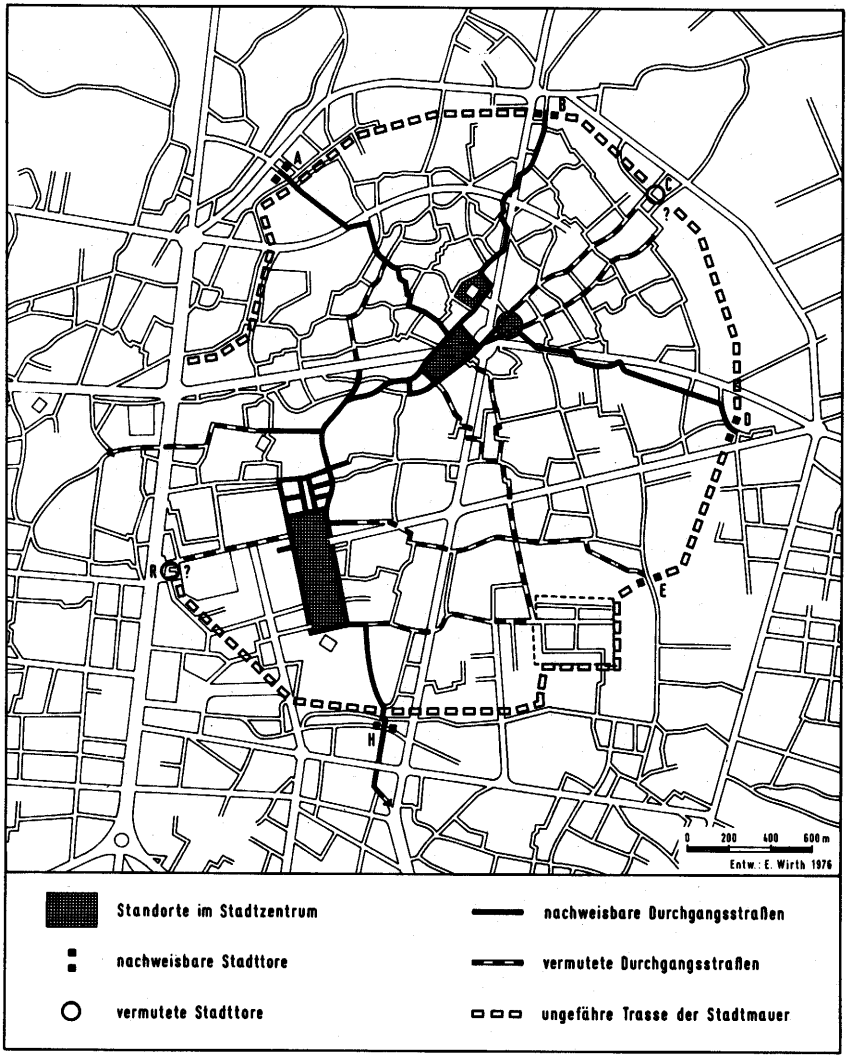
都市の発展とそれに伴う人口や戸数の増加のために，それまでの市壁を越えて市域が拡大している様子が，この短い記事から読み取れる。また，市壁が，その本来の役目であるはずの外敵からの防御のためには，ほとんど役に立たなくなっていたことも明らかだろう。とはいえ，市壁は当時もはや何の意味も持たなくなっていたわけではない。Chardin は，町の記述を，壁の内(l'enceinte

図 1　イスファハーンの市壁　外側の最大のものが Coste による復元



(出典：Šafaqī, S., Ǧoġrafiyā-ye Eṣfahān, Eṣfahān, 1353/1974-75, p. 210)

図 2　Gaube-Wirth による市壁復元図



(出典：Gaube-Wirth, p. 46)

de la ville (Ⅶ, p. 274), l'enclos d'Ispahan (Ⅷ, p. 21)) と外 (dehors, faubourg) にはっきりと分けて行なっているからである。Chardin に情報を伝えた2人のモッラーにとって，そしておそらくは一般のイスファハーン市民にとって，市内と郊外という区別は市壁によってなされていたのである。

ところで，17世紀後半のイスファハーンの市壁の位置については，従来2つの異なった意見がある。1つは，19世紀半ばにフランス人建築家 Coste が示したものである（図1参照）。イラン人の研究者，Šafaqī, Honarfar らは，この説をそのまま採用しており，Šafaqī の書には，この大市壁がブワイフ朝期の古い市壁，アフガン期の縮小された市壁と同じ図面に対照的に描かれている[8]。

これに対して，ドイツの地理学者 Gaube と Wirth は，イスファハーン旧市内における道の角度（方向）の変化や文献に現れる市門の名，1923/24年のイスファハーン市街図などをもとに，この町の市域の歴史的な発展を総合的に検討した結果，今ここで問題にしている時代のイスファハーンの市壁を，図2のように推定した。Coste の図と比較すると，全体としてかなり小さくなっている。15～16世紀のイスファハーンについての専著を出版した Quiring-Zoche は，ほぼこの Gaube-Wirth 説に従っている[9]。

両者を比較してみると，主な違いは，西方，南方の市壁の位置であることが分かる。Coste の図では，Gaube-Wirth の図に比べて，西方，南方の市壁が大きく拡大して書かれているのである。この相違はどのように解釈すべきなのだろうか。ここで市壁について，筆者なりの見解を示しておきたい。

市壁の位置を確定する際に，市門の所在が重要であることは言うまでもない。Gaube-Wirth も市門の位置を手掛かりにして，市壁を復元しようとしている[10]。この作業の過程で，彼らが大いに参考にしたのが，Chardin の市門に関する記事である。そこで以下，我々も Chardin の述べる市門について検討してみよう。まず，彼の挙げている市門をまとめて記しておく（Ⅶ, p. 290）。

◇東，南向きの門：①Ḥasanābād 門，②Ǧūbāre 門，③Kahrān 門，④

Seyyed Aḥmadiyān 門

◇西，北向きの門：⑤Dowlat 門，⑥Lonbān 門，⑦Toqčī 門，⑧Dardašt 門

このうち，東，北向きの5門（②③④⑦⑧）の位置については，特に問題はない。1923/24年の地図にもその名が記されているし，そもそも Coste と Gaube-Wirth の間でも，名称，位置が一致している。問題は，南向きの①Ḥasanābād 門と西向きの⑤Dowlat 門⑥Lonbān 門である。これらをどこに置くかによって，市壁の位置も変化することになるだろう。しかし，幸いにも，これらのうちの二つについては，比較的簡単にその場所を決定できる。

Ḥasanābād 門という地名は，1923/24年の地図に見られ，今日の街区名にもそれらしいものが残っている（図3，現在のイスファハーン街区図参照）[11]。その位置はGaube-Wirth の比定した通りである（図2の H）。Ḥasanābād 門付近についての Chardin の記事に現れる建築物のうち，今日この周辺に残っているものも多い[12]。現在，この地点には門の形跡は全く残っていないが，かつてここに門があったことは確実だろう。また，Dowlat 門は，延長される以前の Čahārbāġ 大通りの北の端にあったと推定される（図2の R）。1923/24年の地図には，その名が記されており，Ḥasanābād 同様今日の街区名としても残っている（街区図72）。またアッバースⅠ世がここを Čahārbāġ 大通りの始点としたことがペルシア語史料からも確認できる[13]。Chardin の記事によっても，おおよそこの位置に門があったことは，明白である（Ⅷ，p. 133）。

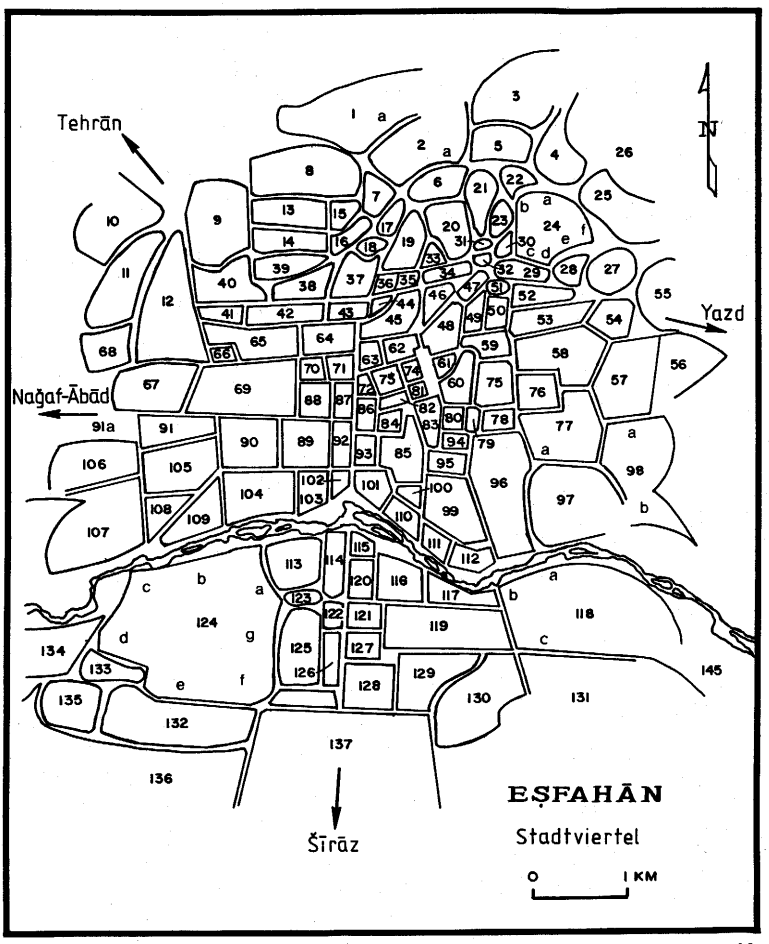
これに対して，Lonbān 門の比定は難しい。Gaube-Wirth も，その位置を不明のままにしているほどである[14]。Lonbān は，今日のイスファハーン市街地の南西部分，ザーヤンデルードのすぐ北にある地名であり，今日の街区名としても残っている（図3，街区図105）。Mehrābādī によれば，かつては近郊の村だったが，イスファハーン市の拡張に伴って市域に編入されたという[15]。だとすれば，西アジア・イスラム世界の都市にしばしば見られるように，Lonbān 門は，イスファハーン市内から Lonbān に向けての道，即ち南西への道の

途中にあったと考えてよかろう。Dowlat 門の南は宮廷地帯で，門の余地はなかった筈だから，Lonbān 門は Dowlat 門と Dardašt 門の間，それも Dowlat 門に近い方にあったことになる。ところが，Chardin は Dardašt 地区の端に 1669 年に新しく門が作られ，'Abbās 門と呼ばれたこと，さらに，その近くにあった門が，「死の門」として開かずの門になっていたため，Dowlat 門が作られたことを伝えている（Ⅷ，pp. 132-133)。これら 2 つの門と，Lonbān 門の位置関係がはっきりしない。さらに，1923/24 年の地図には，Dowlat 門の少し北に Kūšk門 (Darb-e Kūšk) と記される地があり，問題はさらに複雑となる。残念ながら，目下，筆者の手持ちの材料では，これらの門の位置を整合的に決定することはできないので，ここでは Lonbān 門は，Dowlat 門に近く，町の西側にあった，というにとどめたい。

いずれにせよ，①⑥の門の位置が確定された時点で，当時のイスファハーンの市壁の位置はほぼ明らかである。南は Coste の記す大市壁のようにザーヤンデルードの岸までは行かない。それよりはるか手前の Ḥasanābād 門とそれに連なる壁が市内と郊外を分けていた。西はおおよそ Čahārbāġ 大通りの線が境界となり，この線より西側は郊外であった。1923/24 年の地図を見ると，推定される市壁の北，南，西のすぐ外側を運河が流れている。これらが一種の堀のような役割を果たしていたとも考えられよう。このように，Chardin の記述による限り，当時の市壁は，ほぼ Gaube-Wirth の想定した位置にあったと考えて大過ないのである[16]。Chardin 報告は，全体として正確で信頼できるものであり，市壁の位置のように重要な点で大きな誤りを犯しているとは考えられない。そもそも，彼は Xāǧū，'Abbāsābād など，今日その位置がはっきりしている地区（図 3，現在の街区図 96，104）を郊外として記述しているのである。また，Xāǧū 地区の記述では，人家のはてには野原が広がっていると記しており，Coste によればそのあたりに存在したはずの市壁については全く触れていない。

以上の検討により，当時のイスファハーンの市域は，図 2 が示すようにかな

図 3　現在のイスファハーン街区名とその位置



1 – Šamsābād
1a – Šīrnān
2 – Čeheldoḫtarān
2a – Mehrābād
3 – Bāġ-e Qūšḫāne
4 – Moṣallā
5 – Felfelčī
6 – Bāġ-e Ṣoheil
7 – Ḥābǧān
8 – Tīrān-e Āhengerān
9 – Dastgerd
10 – Barzān Āpārān
11 – Bāġ-e Šāh
12 – Ǧūzdān
13 – Lark-e Bīdābād
14 – Alvār-e Bīdābād
15 – Mūrhān
16 – Ābpaḫšān
17 – Darvāze-ye Nou
18 – Ṣarrāfhā
19 – Sombolestān
20 – Dardašt
21 – Šahšahān
22 – Ṭoǧčī
23 – Bābā Qāsem
24 – Ǧūbāre
24a – Pāšāḫ

24b – Latfar
24c – Meidān-e Mīr
24d – Yāzdahpīč
24e – Darbedariče
24f – Seyyed Aḥmadiyān
25 – Fārsān
26 – Šāh Mīrḥamze
27 – Pāyindarvāze
28 – Golābgīrān
29 – Meidān-e Mīr
30 – Latfar
31 – Abū Esḥāqīye
32 – Neṭāmīye
33 – Darb-e Emām
34 – Kūye Ǧamāle
35 – Dār-e Qaser
36 – Tall-e 'Ašeqān
37 – Pošt-e Bārū
38 – Čahārsū 'Alīqolī Āqā
39 – Qeble Do'ā
40 – Pāčenār-e Bīdābād
41 – Še'eiš-e Bīdābād
42 – Bīdābād
43 – Bāb-e Homāyūn
44 – Bāġ-e Qarakīyā
45 – Masǧed-e Hakīm
46 – Nīmāvard
47 – Meidān-e kohne
48 – Golbahār
49 – Yazdābād
50 – Emāmzāde Esmā'īl
51 – Namakī
52 – Dāro-l-Beṭīḥ
53 – Aḥmadābād
54 – Bāqer Ḫān
55 – Āsenǧān
56 – Sāsān
57 – Bāfǧān
58 – Karrān
59 – Yazdābād
60 – Maqṣūd Beig
61 – Taḫt-e Garbad
62 – Ḍāro š-Šefā'
63 – Gūšḫāne
64 – Darb-e Kūšk
65 – Maḥalle-ye Nou
66 – Seyyede Fāṭeme
67 – Alyāderān
68 – Dār-e Bāġ-e Šāh
69 – Čahārsū Šīrāzīhā
70 – Sarlat
71 – Ǧahānnemā
72 – Doulat
73 – Čehel Sotūn
74 – Touḥīd Ḫāne
75 – Pā Qal'e
76 – Qal'e Tabarak
77 – Bāġ-e Morād
77a – Tarvāskān
78 – Šeiḫ Yūsef
79 – Qaṣr-e Moušī
80 – Bāǧāt
81 – Ḫoršīd
82 – Behešte-e Āīn
83 – Masǧed-e Šāh
84 – Goldaste
85 – Šāhzādegān
86 – Hašt Behešt
87 – Bāġ-e Taḫt
88 – Šamsābād
89 – Qezelbāš
90 – Mastahlak
91 – Ǧū-ye Šāh
91a – Bāġ-e Nou
92 – Bāġ-e Nastaran
93 – Fatḥābād
94 – Ḫoseinābād
95 – Čahārsū Naqāšī
96 – Ḫāǧū
97 – Bāġ-e kārān
98 – Tarāzābād
98a – Nūrbārān
98b – Bāġ-e Šāh
99 – Ṣāleḥābād
100 – Čarḫāb
101 – Ṭāvus Ḫāne
102 – Šīr Ḫāne
103 – Bāġ-e Ǧannat
104 – 'Abbāsābād (Tabrīzīhā)
105 – Lonbān
106 – Sepole
107 – Nāžhān
108 – 'Alīābād
109 – Bāġ-e Mahyār
110 – Bāġ-e Qara Ḫān
111 – Bāġ-e Daryāče
112 – Bāġ-e Nāṣer Bāšī
113 – Bāġ-e Palāsān
114 – Gahǧ 'Alī Ḫān
115 – Sepāhsālār
116 – Haft Dast
117 – Āyne Ḫāne
118 – Gabrābād
118a – Bāġ-e Bādām
118b – Bāġ-e Kāǧ
118c – Bāġ-e Anārestān
119 – Sa'ādatābād
120 – Vazīr 'Aẓam
121 – Dīvān Beigī
122 – Qašqāī Ḫān
123 – Mehragān
124 – Ǧolfā
124a – Meidān-e Bozorg
124b – Meidān-e Kūček
124c – Ya'qūbiyān
124d – Īravānīhā
124e – Tabrīzīhā
124f – Sangtarāšān
124g – Čahārsūq
125 – Sīčān
126 – Mordār
127 – Qorčī Bāšī
128 – Dārūǧe
129 – Sa'ādatābād
130 – Taḫt-e Fūlād
131 – Kūle Pārče
132 – Ḫoseinābād
133 – Marhān
134 – Bāġ-e Daryāče
135 – Ḫorramābād
136 – Faraḫābād
137 – Hezār Ǧarīb

り古く不完全な市壁に囲まれた市内とその外に広がる郊外からなっていたことがほぼ明らかとなった。市壁は防御壁としての機能をほとんど果たしえなかったため，その意味では人々にとって役に立つ存在とは言えなかったが，依然として市内と郊外を区分する区切りとしては意識されていた。

次章で市街地について具体的に検討する前に，Coste の伝える幻の大市壁の問題を解決しておこう。イスファハーンの市壁に関して，19世紀後半の史料 *Ǧoġrāfiyā-ye Eṣfahān* は次のように記している。

> かつて3つの城壁（ḥeṣār）が，この町のために築かれた。1つは Ṭahmorāṯ の壁（bārū）で，日干し煉瓦（ḥešt）と土（gel）で出来ていた。その当時のいくつかの街区（maḥallāt）の周りを囲んでいた。今日その大部分は失われたが，残っている部分はどこも，かなりの高さ，厚さで，非常に堅固である。第二に，ブワイフ朝 'Adod al-dowle が日干し煉瓦と土で壁を築き，その当時の新しい街区を囲んだ。城壁（heṣār）を Ṭahmorāṯ の壁（bāre）と結び付けた。これもまた，強固なものだったが，その大部分は荒廃し，耕地や家屋となってしまった。一部が残っている。3つめは，Ašrāf の壁である。アフガン族の Ašrāf が自らを守るために，日干し煉瓦，土，しっくい（gač），焼き煉瓦（ağūr）で高く厚い非常に堅固な壁を築き，壁のなかった街区を囲った。その多くもまた荒れ果て，そのままの状態ではほとんど残っていない[17]。

この史料によれば，イスファハーンにはイスラム以前，ブワイフ朝時代，アフガン時代の3度市壁が築かれたことになる。しかし，サファヴィー朝時代に新たに市壁が築かれたとは記されていないのである[18]。つまり，Chardin が見，Gaube-Wirth が想定した市壁は，ブワイフ朝時代からの古い城壁だったことになろう。

それでは，Coste は全くの虚偽を書き残したのだろうか。そうではなさそうである。1923/24年の地図を調べてみると，Coste が書き残した大イスファハ

ーンの門の名の大部分が，彼の記録した位置に記されているからである。現段階で断言は出来ないが，筆者はCosteの大市壁について，次のように理解するのが最も矛盾がないのではないかと考える。彼がイスファハーンを訪れた19世紀半ばには，市内から各地に通じる道路の途中に門があった。その位置から考えるとこれらの門の起源はサファヴィー朝期に求められるべきかもしれない。いずれにせよ，それらは単に門であり，ほぼ間違いなく税徴収を目的として設けられたものだった。これらの門をつなぐ市壁は実際には存在しなかったにもかかわらず，往時のイスファハーンの繁栄を知るCosteは，想像で門をつなぐ市壁を作り上げた。ただし，後にも述べるように，17世紀後半には，サファヴィー朝諸王のもとで，大規模な建築事業がいくつも行なわれている（後述224頁）。*Ǧoġrāfiyā-ye Eṣfahān*の記述にもかかわらず，Chardinが去ってからあとで（17世紀の末に）壁が築かれたという可能性もわずかではあるがないわけではない。今後の新史料をなお検討して行く必要があろう[19]。

このように，アッバース1世をはじめ少なくとも1676年以前のサファヴィー朝の王たちは，イスファハーンを首都としたにもかかわらず新たな市壁を建設しなかった。彼らは自らの権力の象徴として，都市の壁を必要とはしなかったのである。彼らの建設意欲は壁とは別のところ，モスク，キャラヴァンサライやバーザール，橋，郊外の大規模な庭園と四阿などの建設に注がれた。このことは，サファヴィー朝王権と都市との関係を考える際に，十分に考慮に入れておくべきことだろう。

3. 市内と郊外

1. 市内

市内の地誌の検討にあっては，Chardinを全面的に利用するが，はじめに彼

による市街地の描写方法を説明しておこう。彼は，原則として一本の道に沿って歩を進め，その道沿いにあるモスク，バーザールなどの公共建築物と大きな館の説明をしていく。例えば，「Ḥasanābād 門から入って，「王の広場」に向かう道沿いには，これこれの建造物がある」といった具合である。そして，時に「これから述べる(ここまで述べてきた)のは某地区のことである」と，街区名（と考えられるもの）にも言及している。従って，街区名は記されている場合とそうでない場合とがある。街区名が記されている場合には，各種地図や現在の街区名を手掛かりに，比較的容易に記述されている地区の位置が確かめられる。しかし，街区名がなく道の名しかない場合，あるいは，街区名，道の名の両方が共に記されていない場合，その位置の確定はかなり難しい。記述の前後関係，彼が書き残した建造物名と現存する建造物名との対照などから，ひとつひとつ場所を決めて行くしか方法がないのである。そのような作業によって，筆者はイスファハーンの市街地を次の18の地区に区分した。各地区の境界は必ずしも明確ではないので，図4には，各地区のおおよその位置だけを記入した。また，各々の位置の確定について問題があるものは，本文，及び注で適宜論じている。以下，各地区名を列挙し，それぞれの地区についてのChardinの描写のうち，地区の特徴や町全体の特徴を理解するために重要だと思われることを記して行く。地区名または街区名は，それが明らかな場合のみ名を挙げている(地区名は全て復元形。Chardinの原語は（　）内に付す)。名がはっきりしない時には，地区の位置をそのまま仮称として示す。また，各地区名の後ろにChardinの報告の対応ページ数を記した。

① Ḥasanābād (Hassen abad) (Ⅶ, pp. 293-327)：市内への南の入り口。ここから始まるバーザールは「王の広場」を経て，北のToqčī門まで続いていたという。この地区にある屋敷の一つに当時のイスファハーンのdārūġe (gouverneur) が住んでいた。元来墓地だったある地域が，市内の人口の増加によって，王の臣下に割り当てられ，宅地化されたことが報告

されている。サファヴィー朝の首都となる以前は，このあたりはおそらく町外れだったのだろう。

② 「王のモスク」裏（Ⅶ，pp. 327-334）：西の宮廷地区に隣接。要人の邸宅が多い。王立の武器作り工場，宮廷のゴラームたち専用の店などがあり，この地区の西端には，宮廷の「台所門」があった。

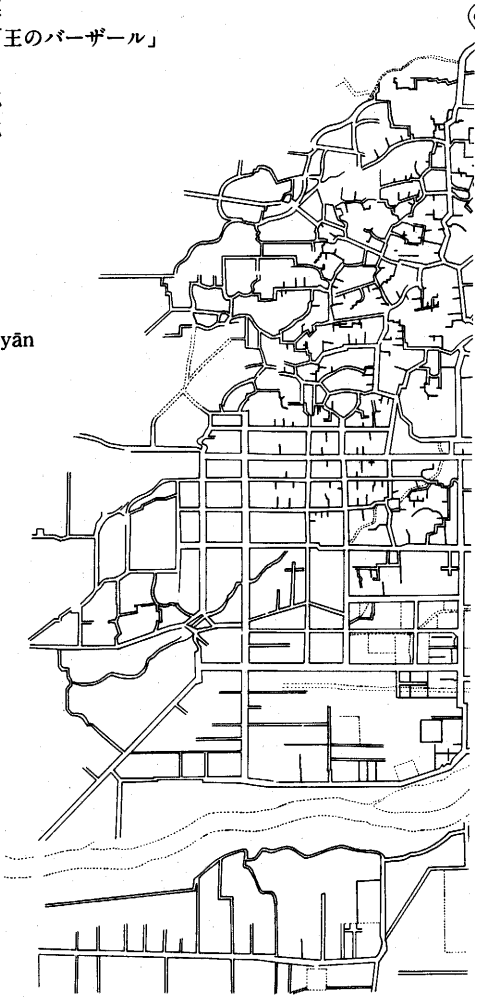
③ 「王の広場」と「王のバーザール」（Ⅶ，pp. 334-368）：新市街の中心。南に「王のモスク」，東にロトフアッラーのモスク[20]，西に宮廷地区への入り口であるアリーカプ門，北に「王のバーザール」(カイセリーヤ)への入り口を配した世界最大の広場。その周縁を運河が流れ，四周のギャラリーとの間にはプラタナスの木が植えられていた。ギャラリーには馬具，武器，宝石をはじめとする様々な品物を扱う店やコーヒー店などが並び，広場自体にも露店が多くあった（Chardin は細かく店の業種と場所を書き記している)。「王のバーザール」への入り口の両側には二層の建物 Naqqārxāne があり，たそがれ時（バーザールが閉まる時刻）と真夜中に管楽器と打楽器が演奏され，時を知らせたという。この地区には多くのキャラヴァンサライがあったが，インド人の両替商が集まるもの，アルメニア商人がイギリス製毛織物を専門に扱うものなど，それぞれ特徴を持っていた。「王のバーザール」の入り口を入って直進し，突き当たりにあった病院の手前までをこの地区に含める。

④ 宮廷（Ⅶ，pp. 368-388）：アリーカプ門の西側に始まり，「王の広場」の南西に広がる。壁で外部とは仕切られ，5つの主要な門があった。チェヘルソトゥーン宮，ハシュトベヘシュト宮とその庭園，ハレムなどからなっていた。大きな宮殿はなく，庭園的な空間が大部分を占めていた。

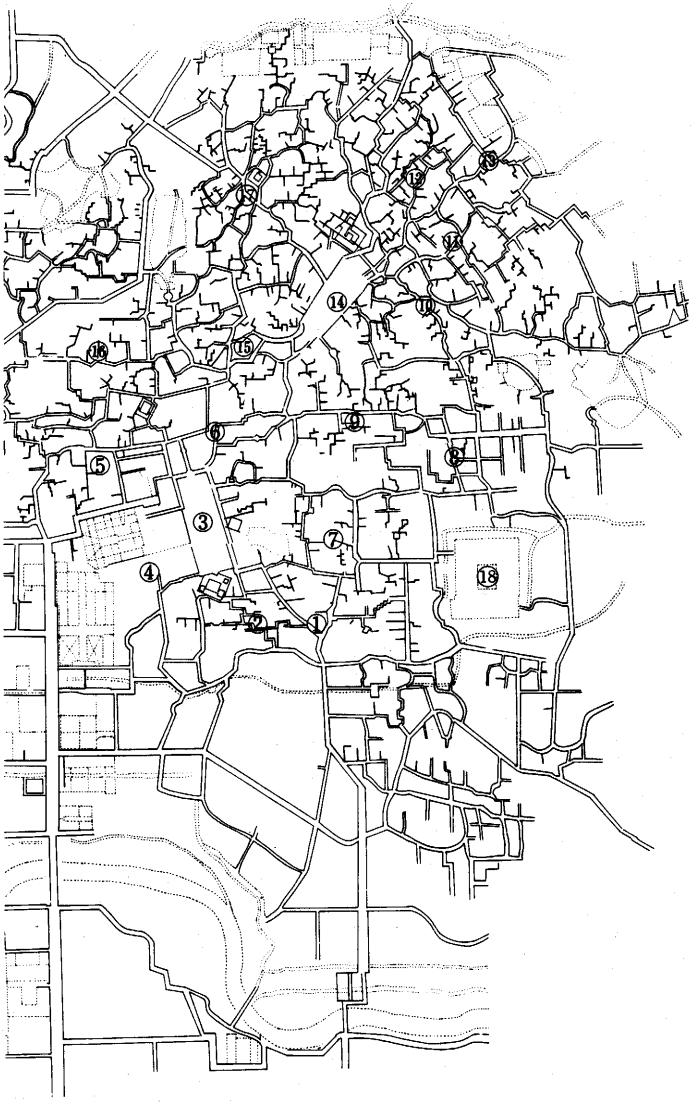
⑤ 「王の広場」西北（Ⅶ，pp. 388-402）：「王のバーザール」北の病院から西に長く伸びるバーザールを中心とした地区。「王の広場」で公式の行事がある時に，広場の露店を一時待避させる「新広場」があった。バーザー

図 4　イスファハーン市内の地区

① Ḥasanābād
②「王のモスク」裏
③「王の広場」と「王のバーザール」
④ 宮廷
⑤「王の広場」西北
⑥「王の広場」東北
⑦ Kahrān
⑧ Aḥmadābād
⑨ Yazdābād
⑩ Darb-e ʻAtīq
⑪ Maqṣūd Beyg
⑫ Latfar
⑬ Seyyed Aḥmadeyān
⑭ Taxtgāh
⑮ Nīmāvard
⑯ Lonbān 門
⑰ Dardašt
⑱ 城塞



1676年のイスファハーン



ルやキャラヴァンサライ，王の工房などとともに，バーザールから一歩入った通りには，有力者の館も建てられていた。

⑥「王の広場」東北（Ⅶ，pp. 403–407）：今日の大バーザールの一部を形成する商業地区。イギリス東インド会社の事務所[21]（Chardin の頃は，その活動は不活発だった）は，この一角にあった。多くのバーザール，キャラヴァンサライやハンマーム，これらをワクフ財産とするモスクやマドラサがあり，賑やかな地区だった。

⑦ Kahrān[22]（Kerron）（Ⅶ，pp. 407–422）：Chardin の記述は，今日の同名の街区よりもかなり広い地域を扱い，Schafaghi による今日の街区表ではおおよそ 58, 60, 75 をあわせた地域を含む。1675–76 年に Chardin が住んだ家（元高級娼婦の館）はこの地区にあった。また，オランダ東インド会社の事務所，カプチン派修道院もあった。この修道院は，王から空いている屋敷を借りて修道院としていた他の宗派のものとは異なり，彼らの所有物であったという。この地区の西部，「王の広場」に面したシャイフロトフアッラー・モスクの裏側にあたる地域は，イスファハーン随一の「悪所」で，多くの娼婦がおり，彼女らの「営業」用のキャラヴァンサライがあった[23]。「王の広場」や宮廷に近い地区には要人の館が多く，城塞に近い地区には庶民の家が立ち並び，その間には小さなバーザールがいくつもあった。Chardin 自身が住んでいた地区であるため，他の地区と比べて叙述が詳細である。

⑧ Aḥmadābād（Ahmedabad）（Ⅶ，pp. 422–423）：7 の Kahrān 地区の東北にあたる地域。TAVO の地図では，Kahrān 区の西に記されているが，1924 年の地図，現在の街区図に従う。Chardin が書き残すような重要な建造物は少なかった。その位置から考えて，一般庶民の家が多かったのだろう。

⑨ Yazdābād（Yezd）（Ⅶ，pp. 423–427）：Schafaghi の街区表では，49,

50, 59のあたり，イマームザーデ・イスマーイールを中心とした地区。ここにも要人の邸宅がいくつかあった。坂本氏によれば，19世紀には，この地区の長だけが kalāntar と呼ばれていた[24]というが，残念ながら Chardin には，これに関連するような記述はない。

⑩ Darb-e ʻAtīq (Darbetic) (Ⅶ, pp. 427-440)：別名 Meydān-e Mīr. Schafaghi の街区表では，29, 51, 52 のあたり。旧市街の中心である古広場に近く，人口稠密区の一つ。アッバース2世時代の町の kalāntar (grand prévôt) の邸宅，カルマト派修道院はこの地区にあった。

⑪ Maqṣūd Beyg (Macsoubec) (Ⅶ, pp. 440-441)：古広場から東北へ伸びる2本の道路のうち，南側の一本に沿った地区。Chardin は，この地区を表すのに街区を意味する quartier ではなく vallée (谷) という言葉を用いている。前後関係から，明確に一つの地域と見なしうるので，ここでは独立の地区として扱う。なお，今日の街区表では，60の街区名が Maqṣūd Beg であるが，これとの関連は不明である。ワクフ対象施設として建設されたマドラサとワクフ財産のキャラヴァンサライ，ハンマームなどがセットになって，多く存在していた。

⑫ Latfar (Leutfer) (Ⅶ, pp. 441-444)：ここも⑪同様 vallée という語で表されている。⑪の一本北の通りを中心とした地区。現在の街区表では 24b, 30 が Latfar と呼ばれている。アッバース1世がイスファハーンを都と定める以前の naqqārxāne はこの地区の南端，古広場に面したところにあった。また，ユダヤ教徒が住み，彼らのシナゴーグも存在した。⑧や⑪，⑬とともに市の東部地域を構成するが，新市街からは遠く，宮廷関係者の邸宅は少ない。

⑬ Seyyed Aḥmadeyān (Seïd Ahmedion) (Ⅶ, pp. 444-449)：イスファハーン市の東向きの門の一つを地区名とすることからも分かるように，町の東端の街区であったと考えられる。しかし，この地区に関する Chardin

の記述は，やや混乱している。門やそのそばの建築物に関する説明とともに，Hārūn-e Velāyat の名で知られる聖者廟や古広場地区の諸建築など町の中心地区の説明をも同じ地区にあるものとして行なっているからである。後半は別の地区のこと（次の⑭にあたる）として独立させて考える必要がある。この地区には，セルジューク朝時代の有名な大宰相 Neẓām al-Molk の墓のあるモスク，それに庶民の信仰を集めるいくつかのイマームザーデがあった。

⑭ Taxtgāh (Taktga) (Ⅶ, pp. 449–460)：アッバース1世時代以前の町の中心，古広場とその周辺の地区。Chardin の頃も，バーザールで買物をする人々，無数にあるコーヒー店や阿片宿で飲み物を飲みながらおしゃべりを楽しむ人々，イマームザーデの Hārūn-e Velāyat に詣でる人々などで大変な賑わいを見せていた。広場から南西に伸びる今日の大バーザールとその周辺には要人の邸がいくつかあった。

⑮ Nīmāvard (Nimaourde) (Ⅶ, pp. 460–465)：今日の大バーザール地区の一部。Chardin は，Schafaghi の街区表の 46 と 45 の東半分位にあたる地域を扱っている。商業地区で，モスク，マドラサ，キャラヴァンサライなどの公共建築物が多かった。が同時に，有力者の館も多く建てられていた。「王の広場」や宮廷などの新市街と，本来の町の中心である Taxtgāh のどちらにも近く立地条件が良かったせいだろう。今日では，Ḥakīm モスクのある地区は Masǧed-e Ḥakīm という名で独立しているが，Chardin はこのモスクも，Nīmāvard 地区に含めている。

⑯ Lonbān 門 (Lombon) (Ⅶ, pp. 465–468)：この地区の比定はきわめて難しい。前章で述べたように，Lonbān 門の位置自体がいま一つ不明確だからである。さらに，残念ながら，この地区の建築物として Chardin が挙げているものは，今日管見の限りどれ一つ残っていない。唯一ヒントとなるのが，この地区の記述の最後にある Chardin の「これが Ǧūbāre (Joubaré)

の名を持つ町の半分の主要な建造物の最後である。」(p. 468) という言葉である。後にも触れるように，当時のイスファハーンの町は，大きく Ǧūbāre と Dardašt という二つの地域に分かれていた。Dardašt 地区は，次の⑰で述べるように，町の北から東北方面を占めていた。市内の市街地全体から，これまで述べてきた地域とこの Dardašt 地区を除くと，町の西北西，今日の街区図でいえば，36，44，45の西半分のあたりが残る。Lonbān 地区がこのあたりにあったと想定すると，Lonbān 門が町の西側，Dowlat 門と Dardašt 門の間にあった，という前章での結論とも適合する。そこで，とりあえず本稿では，この位置に Lonbān 門地区を比定しておく。この地区には，セルジューク朝，マリクシャーの侍医の邸をはじめ，いくつかの古い邸宅があり，古くから市街地の一部であった[25]。

⑰ Dardašt (Deredechte) (Ⅶ, pp. 468–483, Ⅷ, 1–21)：市街地の半分近くを占めるこの地区 (Schafaghi の街区図では，6，17，18，19，20，21，22，23，33，35のあたり) についての Chardin の記事は，これまでの地区のそれに比べると，やや分かりにくい。「この地区はいわゆる旧市街 (vieille ville) である。美しいもの，注目すべきものは何もない。家は小さく，家並みは低く，重なるように立ち，町の他の地区のように庭園もない。(中略) 案内人を必要とするような真の迷路である。」(Ⅶ, p. 482) と記しているように，彼自身のこの地区に関する調査も不十分なものだったのだろう。これだけの広い地域であるにもかかわらず，細かく地区毎に分けた説明は行われていない。当然，街区の名もほとんど不明である。本稿では，便宜的に以下の4つの下位区分を作るが，aの狭義の Dardašt 地区，bの Ḥoseynīye 地区を除いては，場所の正確な比定は出来ていない。

a. Dardašt (Deredechte) (Ⅶ, pp. 468–483)：今日の Dardašt 地区 (Schafaghi の街区図の20) に相当する。多くのバーザール，ハンマーム，モスクが記録されているが，その正確な位置は不明なものが多

い。Chardinによるこの地区の描写の中には，既に14の Taxtgāh 地区で述べられた古広場に関する記事が再び現れる。この広場の周辺にも，娼婦街，男娼の置屋などある種の妖しげな「都市の魅力」を構成する地区があった。

b. Ḥoseynīye (Heussenie) (Ⅷ, pp. 1–17)：今日 Šahšahān と呼ばれる地区 (Schafaghi の街区図の21) のことである。Chardin の記述では，セルジューク朝以来の金曜モスクは，この地区に含まれる。イスファハーンの有力家系の一つ，Šahšahān 家の邸宅とその祖，Šāh ʻAlā al-Dīn Moḥammad の墓廟がこの地区にあった。この人物は，15世紀前半のイスファハーンで naqīb 職[26]にあり，のち反乱の罪で，ティームール朝君主，シャールフによって処刑された[27]。市民は彼の遺体をこの地に葬って，墓廟は一種の聖地になっていた。この一族の後裔は今日までイスファハーンの名家である[28]。この地区にも，要人の館があったが同時に，多くのハンマームやイマームザーデ，モスクなど都市で人々が生活して行く上で必要な施設が整っていた。アウグスト派修道院はこの地区にあったが，Chardin の頃には既に荒廃していたという。

c. Dardašt 門から ʻAbbās 門へ (Ⅷ, pp. 17–18)：Schafaghi の街区図の17，18，19あたりの地区のことであろうと思われるが，はっきりとは確認できない。ハンマームについての記述が多い。生活人口が多かったのだろう。

d. Qaṣr-e Bolaqī：(Ⅷ, pp. 18–21)：Schafaghi の街区図の19，33，35あたりではないかと考えられる。この地区には，王がしばしば外国の使節を宿泊させる大きな館があり，この館の名がそのまま地区の名となっていた。外国の使節を宿泊させる場所が，「王の広場」や宮廷地区から遠く離れていたとは考えられないので，大体上記の地域あた

りに比定して間違いはないだろう。この地区には，大きな庭のあるイマームザーデ，墓地などがあり，一般庶民の家は少なかったようである。

⑱ 城塞 (Cala teberrouk<Qal'e-ye tabarrok) (Ⅶ, pp. 483-492)：市街地の東南隅にあり不規則な四角形をしていた。一辺は約千歩だったという。周囲を堀が囲っていた。その起源は不明。中には兵士が住むための家が370戸，モスクやハンマーム，守備隊長の館，広場，塔などがあった。塔には，サファヴィー王朝の宝物の一部（武器，金製や宝石をちりばめた鏡，食器，トルコ石などの宝石など）が収蔵されていた。

以上，市内各区の特徴を述べてきたが，郊外の記述に入る前に，当時のイスファハーンを知るために欠かせないChardinの記述を，「史料として」利用する際に注意すべき点を二三指摘しておきたい。一つは，地区ないしは街区という当時の西アジアの都市における基本単位に対してChardinの関心が欠如しているという事実である。彼は必ずしも全てイスファハーンの街区名を記録してはいない。また，記録している場合でも，どこからどこまでがその街区に属するのかを明確には示していない。当時，街区という都市の単位がなかったとは考えられない。19世紀の史料にはその存在が記されているからである[29]。その結果当然ではあるが，Chardinにはそれぞれの街区のプラン，指導者の存在の有無など，今日の関心からすれば重要な問題と考えられることにまでは踏み込んだ記述がなされていない。記述はあくまでも，主要な建築物とそれにまつわる話に限られているのである。dārūġaやkalāntarなどイランの都市社会を考える際に最も重要な術語の使用にも混乱が見られる[30]。この点からみると，Chardinの旅行記はよく出来てはいるが，やはり数年間ペルシアにとどまった人間が外側からイスファハーン市を眺めた記録でしかないのである。

第二に，その外側から見た記録にも，地区によって情報の豊かさ，正確さに差があることを認識しておかねばならない。既に⑰のDardašt地区のところ

で記したように，イスファハーンの旧市街だったこの地区に関する Chardin の記述は，やや精彩を欠き，混乱も見られる。また，当然触れられているべき建造物についての説明がない場合もある（具体的には，表3参照）。その最大の原因は，Chardin やその情報提供者の二人のモッラーがこの地区と縁遠かったということではなかろうか。以下でも取り上げるように，彼らは政治的な有力者や王室の関係者については，かなり正確な情報を持っていた。「王の商人」という称号を拝領した Chardin とその彼が雇ったモッラーであってみれば，これは当然のことであろう。しかし，王室とはあまり関係の深くない人々が多く住む Dardašt 地区については，情報を求めるつてが限られていたのだろう。このことは上で述べた第一の点とも関連するが，やはり Chardin の記録が有していた一定の限界だった。

第三に，このような限界があるにもかかわらず，Chardin の報告は，当時の都市社会を考える場合に重要な史料となりうることも強調しておかなければならない。一例として，街区間の対立というイラン都市に特有の問題に彼が言及していることを挙げておこう。Chardinは，当時イスファハーンの町が Ǧūbā-re-Ne'matallāhī (Joubaré Neamet Olahi) と Dardašt-Ḥeydarī (Deredechte Heideri) という二つの地区に二分されていたこと，この二つの地区の人々は，儀式，祭りなどことある毎に反目しあって時には殴り合いの喧嘩まで行なっていたことを伝えている（Ⅶ，pp. 289-293）。彼はこの対立を元来二つの別の集落が一つになって形成されたイスファハーンという町に独特のものと考えているが，これは，11世紀から今世紀初めまで続いたイラン都市一般に見られるきわめて特異な現象に関する貴重な報告なのである[31]。また，彼が書き残した要人の館や公共建築物に関する報告から，都市域の発展の具体的な様子，当時の都市社会とサファヴィー朝権力者とのかかわりを考えることも可能である。このように，注意して利用しさえすれば，Chardin が極めて有益な史料となりうることは確かである。

2. 郊外

一応市壁で区切られてはいたが，郊外も当時のイスファハーンの町を構成する重要な要素だった。市壁自体が相当傷んでいたことを考えれば，市内と郊外は一体だったとも言える。郊外と市内をあわせて考えて，はじめてこの町の発展形態や特徴を論じることが出来るのである。地域分けがやや複雑な市内とは異なり，郊外についてのChardinの記述は比較的分かりやすい。筆者は，彼の記述に従ってこれを以下の13の地区に分類してみた。その位置については，図5を参照戴きたい。また，郊外各地区については，Chardinは地区毎にその戸数，主要な公共建築物（モスク，バーザール，キャラヴァンサライなど）の数を記している。ここでは，これを表にして示しておく（表 2)。

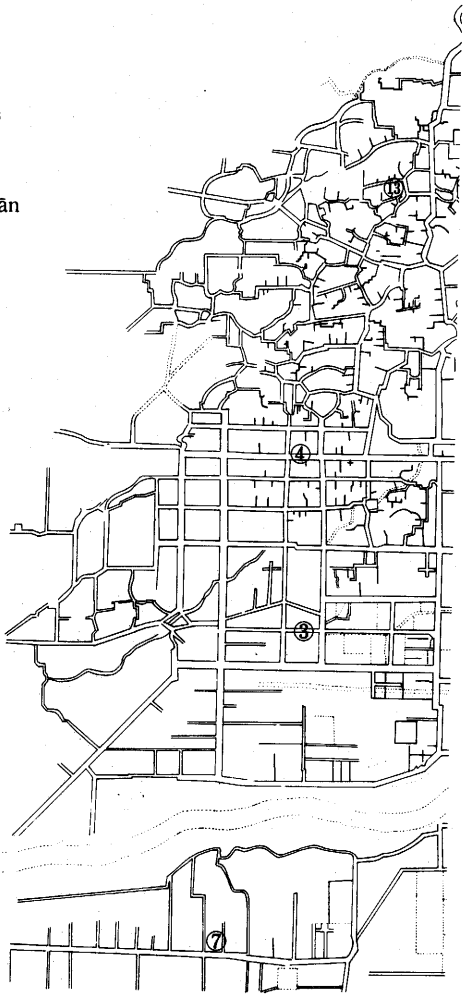
① Čahārbāġ (tchar-bag) (Ⅶ, pp. 21-43)：アッバース1世が建設した新しい通り，Čahārbāġ とその周囲の庭園群を含む地区。Čahārbāġ 大通

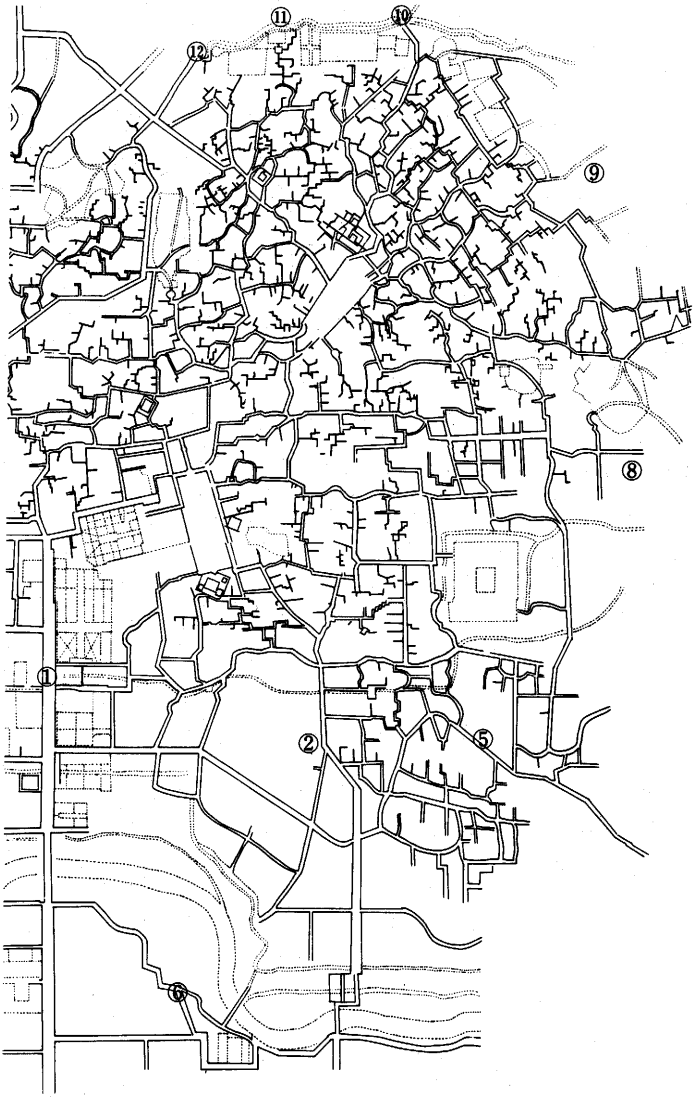
表 2　イスファハーン郊外地区の戸数・主要建築物数

地区名	戸数	モスク	マドラサ	キャラヴァンサライ	バーザール	ハンマーム
Čahārbāġ	—	—	—	—	—	—
Xāǧū	1111	12	8	15	12	21
ʻAbbāsābād	2000以上	12	5	24	—	19
Šamsābād	611	—	—	—	—	—
Šeyx Sabanā	207	2	2	3	2	2
Saʻādat-e ʻAbbās	—	1	—	—	—	—
Ǧolfā	3400～3500	—	—	—	—	—
Kahrān	28	2	—	2	—	—
Seyyed Aḥmadeyān	158	2	—	—	4	—
Toqčī	80	—	—	—	4	—
Folfočī	150	2	—	—	4	—
Dardašt	85	2	—	—	4	—
Bīdābād	883	8	—	11	5	4

図 5　イスファハーン郊外の地区

① Čahārbāġ
② Xāǧū
③ ʻAbbāsābād
④ Šamsābād
⑤ Šeyx Sabanā
⑥ Sa ʻādat-e ʻAbbās
⑦ Ǧolfā
⑧ Kahrān
⑨ Seyyed Aḥmadeyān
⑩ Toqčī
⑪ Folfočī
⑫ Dardašt
⑬ Bīdābād




⑪
⑩
⑫
⑨
⑧
①
②
⑤
⑥

りは，Dowlat 門の横にあった三層の「嫉妬の館」から真っすぐに南に伸び，ザーヤンデルードを渡って南郊の Ḥezār Ǧarīb 庭園にまで達していた。Chardin によれば，長さは3200歩，幅は110歩。道の中央には水の流れが作られ，所々に池が設けられていた。また，両側にはプラタナスが植えられていた。この大通りの左右には，趣向を凝らした庭園がいくつも作られた。ザーヤンデルード沿いには，その中に大官たちの館がある庭園が設けられた。この地区には，一般庶民の家はなかった。

② Xāǧū (Cadjouc) (Ⅷ, pp. 44–66)：Ḥasanābād 門の外側に広がっていた。大小2つの Xāǧū 地区があり，門のすぐ外側が小 Xāǧū，さらにその外側が大 Xāǧū 地区と呼ばれた。広く美しい庭を持った王族の邸宅が多かった。特に，Ḥasanābād 門を出て右側，Čahārbāġ 大通りとの間は，「そこは，オランダの町のように，両側に大木が植わった広い運河が道を横切っている。貴顕しか住んでおらず，大きな館ばかりが目につく。」と Chardin が記しているように (p. 61)，高級住宅街となっていた。Ḥasanābād 門からしばらく行った左手の Ṣāleḥābād (Saleh abad) あたりには，王室の庭師たちが住んでいたという。このことは庭園建設の需要が宮廷を中心とする市の南西部で特に多かったことを示しているのだろう。大 Xāǧū 地区の家並みが切れるあたりには，水車や死体洗い場などがあり，そのむこうは野原 (champs) になっていた。

③ ʻAbbāsābād (Abas-Abad) (Ⅷ, pp. 67–82)：Čahārbāġ 大通りの西にあり郊外最大の地区。別名 Tabrīz-e now (新タブリーズ) とも呼ばれた。アッバース1世がタブリーズから移住させた人々をここに住まわせたことに始まる。Chardin はこの地区について次のように語っている。「ここは町で一番美しい場所である。なぜなら，新しく建てられたために，建物は素晴らしく，町の道路の大部分が曲がりくねっているのに，ここでは広く真っすぐだからである。(中略) 町でここほど金持ち，貴顕の多い場所は

ない。」(p. 67) この言葉通り，この地区には広い庭を持った要人の館が多くあった。イスファハーンの長官 (grand prévôt d'Ispahan) がこの地区に住んでいた，という興味深い記述もある (p. 70)。また，この地区は，アッバース1世によって naqqārxāne を持つことを許されていたが，これは大きな地区だけが持つ特権だったという (p. 78)。

④ Šamsābād (Chems-abad) (Ⅷ, p. 83)：新旧の2つの地区に分かれていた。旧地区は商業地区や「王の広場」から遠く，目立った建造物はなかった。また，新地区は 'Abbāsābād 地区同様新しく開かれ，運河や木々に彩られた道が作られていたが，要人の邸宅は数少なかった。

⑤ Šeyx Sabanā (Cheic Sabana) (Ⅷ, pp. 83–99)：Xāǧū 地区の東側にあった地区。アッバース1世は，アルメニア地方のジョルファー以外から移住させたアルメニア人たちをこの地区に住まわせたが，のちにアッバース2世がこのアルメニア人たちをも新ジョルファーに移したという。またこの地区には，多くの要人の墓，イマームザーデや墓地などがあった。

⑥ Sa'ādat-e 'Abbās (Seadat Abas) (Ⅷ, pp. 99–102)：この地区と次の⑦は，ザーヤンデルードの南側にあった。Čahārbāġ 大通りが，アッラーヴェルディー・ハーンの橋で北からザーヤンデルードを渡って左手，すなわち東側一帯の庭園地区。アッバース2世の建設。それ以前，ここはゾロアスター教徒の居住区だったが，王は彼らを西方ジョルファー地区の端に移動させ，その後にこの大庭園を作らせた。そこには1km四方 (un quart de lieue) の池が作られ，この池の畔の四阿から，池に映る四阿の灯と噴水ごしに花火を見るのが，王のお気にいりの遊びだったという。

⑦ Ǧolfā (Julfa)[32] (Ⅷ, pp. 102–117)：新旧2つに分かれたアルメニア人居住区。旧地区はアッバース1世，新地区はアッバース2世による建設である。その起源は，アッバース1世がオスマン朝との国境地帯にいたアルメニア人を移住させ，ここに住まわせたことにある。並木の植えられた広

い通りが東西南北に走り，整然とした町並みが形成されていた。この地のアルメニア人は，少なくともアッバース2世の時代までは，行政，税制，宗教面などで優遇されたため，ジョルファーは遠隔地商業の中心地となっていた。イエズス会の修道院はここにあった。また，この地区の一角にはゾロアスター教徒居住区もあった。

⑧ Kahrān (Kherron) (Ⅷ, pp. 119–121)：Chardin によれば，ここまでの南，西の郊外に対して，イスファハーン市の東，北側の郊外には見るべきものはあまりなかった。確かに，彼が記している各地区の戸数も東，北側の郊外のそれはあまり多くない。この地区は，その名からも分かるように，Kahrān 門の外側にあった。

⑨ Seyyed Aḥmadeyān (Seid Ahmedion) (Ⅷ, pp. 121–122)：イスファハーン市の東北郊外。Chardin には実質的な記述はほとんどない。

⑩ Toqčī (Tokchi) (Ⅷ, p. 122)：市の北の Toqčī 門外の地区。王の庭園がひとつあった。

⑪ Folfočī (Fulfutchi) (Ⅷ, p. 123)：前の Toqčī 地区と次の Dardašt 地区の間。ここも実質的な記述はほとんどない。

⑫ Dardašt (Derdechte) (Ⅷ, pp. 123–131)：Dardašt 門の外側の地域。大きな墓地があった。

⑬ Bīdābād (Bide abad) (Ⅷ, pp. 131–134)：新しく作られた ‘Abbās 門の外側の地域。ここはかなり人口が多く，少ないながらも要人の館があった。1924年の地図を見ると，軒並み衰退して家屋が少なくなっている他の郊外諸地区とは対照的に，この地区にだけは依然として多くの人々が住んでいた。

以上2節に亘ってイスファハーンの市内と郊外の様子を，主として Chardin の記述によりながら概観してきた。これにより当時の地誌，町の歴史地理的な特徴がかなり明らかになった。そのうち重要だと思われる点をいくつか指摘し

ておこう。

(i) 元来の町の中心である古広場に加えて，この時代には「王の広場」とその周辺地域でも生産，交易活動が盛んになり，イスファハーンは，複数の経済的中心を持つようになった。

(ii) この都市のトポグラフィーの最大の特徴は，南西郊外における宮廷，庭園地帯の存在である。北の Dowlat 門からザーヤンデルードを渡って一直線に南の Hezār Čarīb 庭園まで伸びる Čahārbāġ 大通りは，アッバース1世が遷都を行なう前から作らせていたものだが，その両側に趣向を凝らした多くの庭園が配されていた。また，川の南の Sa'ādat-e 'Abbās 地区もアッバース2世が建設した庭園地帯だった。このように都市の周囲に美しい庭園を配し，市街を飾るかのような都市計画は，遊牧民が政治権力を握ったイランを中心とした文化圏で13世紀以来特に発達してきたもので，イスファハーンはそのような「庭園都市」の頂点に立つものだった[33]。

(iii) アッバース1世の遷都以後，「王の広場」とその南西の宮廷，さらにそれに隣接した庭園地帯が核となって，イスファハーンの南西地域が大きく発展した。これは，郊外各地区の戸数の差にはっきりと表されている。西の 'Abbāsābād，南の Xāǧū 地区には広い庭園を持った有力者の館が数多く建てられ，高級住宅街を形成していた。市街地の東部，北部にも政治的な有力者の屋敷がなかったわけではないが，その数は限られていた。この点については次章でさらに詳しく検討する。

(iv) アッバース1世が建設した 'Abbāsābād，Ǧolfā の2つの地区は，それぞれ，アゼルバイジャンのタブリーズ，アルメニアのジョルファーから，住民を強制移住させて成立したものである。既存の市街地にはあまりとらわれず，その外側に新しい地区を作り，いわば「新イスファハーン」と言うべきものを作り出したところにサファヴィー朝諸王の都市計画の特徴の一つを見いだすことができる。

(v)　従来の「イスラム都市＝曲がりくねった道と袋小路」論との関連で興味深いのは，'Abbāsābād, Ǧolfā の都市計画である。1924年の地図を見ると，'Abbāsābād 地区は居住区としては全く荒廃し，ほとんどが耕地となっているが，そこを通る主要な道は直線である。Chardin もこれらの地区の道路が，市内とは異なってまっすぐで広いことを特筆している（Ⅷ，pp. 67, 103)。Čahārbāǧ 大通りをも含め，サファヴィー朝時代の新市街の都市計画は直線を基本としていたのである。

(vi)　この時代のイスファハーンには，ムスリム以外には少数のユダヤ教徒，ゾロアスター教徒とアッバース1世が移住させたアルメニア人キリスト教徒，ごく少数のヨーロッパ系キリスト教徒がいただけで，異教徒の数はそれほど多くなかった。従って，宗教による住み分けは，オスマン朝領内の諸都市のように大きな問題にはならなかった。それでも，ユダヤ教徒，アルメニア人キリスト教徒には集住の傾向がはっきりと見られる。ユダヤ教徒は市内の中央から東北部に住み，アルメニア人キリスト教徒は南西郊外にまとまっていた。ただし，Chardin 自身が町中に住んだのをはじめ，キリスト教修道会の僧院も市内にあり，住み分けが絶対だったわけではない。

3. 人口

Chardin は，郊外については各地区毎に戸数を記し，さらに郊外全体で8780戸という数字を伝えているが，市内の戸数その他は，一括して記録するにとどまっている。その数字は次の通りである。

戸数：29469（ただし，公共建築物も含む）（Ⅶ，p. 274)

モスク：162，マドラサ：48，キャラヴァンサライ：1802，ハンマーム：273，墓地：12（Ⅷ，p. 134)

市内と郊外を合わせ，宮殿，モスク，バーザールなど主要建造物も含めて，38200～38300戸というのが，Chardin の挙げるイスファハーン市の戸数である

(Ⅶ, p. 274)[34]。この数字から人口をどの位と見なせばよいだろうか。Chardinは，人によって110万人とする者，少なくとも60万人は下らないとする者などさまざまである，とした上で，この戸数の数字をヨーロッパ流の比率で扱って人口を算出してはならない，と戒めている。市中にたくさんあるバーザールには全く人が住まないからというのがその理由である。Chardin自身は，具体的な数字を挙げず，当時ヨーロッパで最も人口の多かったロンドンと同程度だろうと述べるにとどまっている。Dountonによれば，ロンドンの人口は1650年に35万人，1700年に50万人，1750年に67万5千人であったという[35]。Chardinがイギリスに渡るのが1680年代，旅行記の初版が1711年だから，彼の意識の中でのロンドンの人口はほぼ50万人と考えてよかろう。他に当時のイスファハーンの人口をはっきりと記した史料はない。また，これ以上になると，戸数に比べてあまりに人口が多くなりすぎるようにも思える。ここでは一応50万人程度としておこう。

4. 建築物から見たイスファハーン

前の章ではイスファハーンの市街地を歴史地理的に概観したが，ここでは建築物についての3つの表を利用して，都市と政治権力の関わりを考えてみたい。表3は，主にHonarfarとMehrābādīを用いて，Chardinがイスファハーンの記述を行なった1676年に存在していたことが明らかな宗教建築物を，地区別に建設年とその時の王の名（もしくは王朝名），建設者名とともに示し，その建築物に関する記事がChardinに現れるかどうかもあわせて記したものである。また，表4は，Chardin以後1722年のサファヴィー朝滅亡までにイスファハーンで建てられた主な宗教建造物についての同様の表である。さらに，表5はChardinの記事に館（palais）ないしは邸宅（maison）として現れる建造物の数を各地区毎に集計したものである。文武を問わず王朝に官吏として

表 3　1676年に存在した

番号	地区	建　物　名	種類	建　設　年
1	1	Sārū Taqī (大)	M	1053/1643-44
2	1	ʻArabān	Md	?
3	1	Aḥmad	I	?
4	3	Šāh (Emām)	M	1020/1611-12 開始
5	3	Šeyx Loṭfallāh	M	1012/1603-04 開始
6	3	Xwāǧe Malek Mostowfī*	Md	(サファヴィー朝以前？)
7	3	Mollā ʻAbdallāh	Md	1007/1598-99
8	5	Qaračaqāy Beyg*	Md	1075/1664-65
9	5	Sofračī (Sorxī)	M	1014/1605-06
10	6	Sārū Taqī (小)*	M	1056/1646-47
11	6	Ǧadde-ye bozorg	Md	1058/1648-49
12	6	Ǧadde-ye kūček	Md	1057/1647-48
13	7	Sārū Taqī*	Md	17世紀前半
14	7	Ṣafavīye*	Md	16世紀末～17世紀初
15	9	Maqṣūd Beyg	M	1011/1602-03
16	9	Esmāʻīl	I	1043/1633-34
17	9	Ǧaʻfar	I	8A.H. / (ムザッファル朝期)

イスファハーンの宗教建築物

支配者	建設者	Char-din	参考資料
アッバース 2	Sārū Taqī (宰相)	○	H：547-552 G：146-147 M：640-641
?	?	○	M：481-482
?	?	○	M：742-750 G：27-29
アッバース 1	アッバース1世	○	H：427-464 G：107-116 M：659-693
アッバース 1	アッバース1世	○	H：401-415 G：96-99 M：40
?	?	○	H：657 M：38
アッバース 1	アッバース1世	○	H：470-475 G：123 M：494-499
アッバース 2	Ḥāǧī Qaračaqāy Beyg (染物師)	×	M：45
アッバース 1	Xalaf (アッバース1世の sofrečī)	×	H：475-477 G：102 M：643-645
アッバース 2	Sārū Taqī	△	M：641-642
アッバース 2	アッバース2世の祖母	△	H：553-554 M：441-442
アッバース 2	アッバース2世の祖母 (Dalārām Xānom)	△	H：555-556 M：442-444
サフィー or アッバース 2	Sārū Taqī	×	M：39
アッバース 1	?	○	M：44
アッバース 1	Maqṣūd Beyg (アッバース2世の nāẓer)	○	H：467-468 G：99-101 M：728-730
サフィー	?	○	H：522-540 G：131-142 M：750-762
?	?	×	H：300-302 G：36 M：763-765

番号	地区	建　物　名	種類	建　設　年
18	9	Ǧa'farīye	Md	?
19	10	Āqā Kāfūr*	Md	1069/1658-59
20	11 or 12	Ǧūbāre (Pīr Pīnedūz)	M	16c A.D. 以前建設 955/1548-49 修復
21	12	Meṣrī	M	1061/1650-51
22	14	Āqāsī*	M	サファヴィー朝以前？
23	14	'Alī	M	セルジューク朝期建設 16c A.D. 初めに修復
24	14	Ḥāǧ Ḥasan	Md	セルジューク朝期建設
25	14	Hārūnīye	Md	16c A.D. 初め
26	14	Naqqāšān*	Md	?
27	14	Hārūn-e Velāyat	I	918/1512-13
28	15	Ǧārčī	M	1019/1610-11
29	15	Ḥakīm	M	1071/1660-61
30	15	Ḏū al-Faqar	M	950/1543-44
31	15	Ḏū al-Faqar	Md	950/1543-44 修復
32	15	Mīrzā Taqī	Md	1071/1660-61
33	16	Bāġ-e Xāǧī	M	1033/1623-24
34	16	Soleymān Beyg	M	1072/1661-62

支配者	建設者	Chardin	参考資料
?	?	×	M：38
アッバース 2	Ḥāǧī Āqā Kāfūr	○	H：605-608 M：29-30
? タフマースプ	? Moḥammad ʻAlī (Bahrām Mīrzā の rikābdār)	×	H：386-387 G：77-80 M：590-592
アッバース 2	Ḥāǧī Mīrzā Xān (大商人)	×	H：585-588 G：152 M：724-728
?	?	×	H：731 M：48
? イスマーイール 1	? Mīrzā Šāh Ḥoseyn (宰相)	○	H：369-379 G：69-72 M：712-717
スルタンモハンマド (セルジューク朝)	Solṭān Moḥammad	×	H：379
イスマーイール 1	Mīrzā Šāh Ḥoseyn	×	M：508-510
?	?	×	M：40
イスマーイール 1	Mīrzā Šāh Ḥoseyn	○	H：360-369 G：63-69 M：777-785
アッバース 1	Malek Solṭān Ǧārčībāšī	×	H：477-479 M：524-527
アッバース 2	Ḥakīm Dāod Eṣfahānī (王の侍医)	○	H：612-620 G：152-154 M：604-610
タフマースプ	Šeyx Moḥammad Ṣafī	○	H：384-386 M：615-618
タフマースプ	?	×	H：384 M：470-471
アッバース 2	Mīrzā Taqī	×	H：608-610 G：149 M：41-42
アッバース 1	Xwāǧe Rūxallāh b. Nūrallāh Farāhānī (宦官)	×	M：523-524 G：122
アッバース 2	Soleymān Beyg (王室タイル職人)	×	H：611 M：645

番号	地区	建　物　名	種類	建　設　年
35	16	Torkhā	Md	1081/1670-71
36	17	Bābā Sūxte*	M	8cA. H. /14cA. D.
37	17	Ǧom'e	M	11c A. D.
38	17	Darb-e Ṭoqčī*	M	1044/1634-35
39	17	Ḥoseynīye-ye Šahšahān	M	850/1446-47
40	17	Āqā Nūr	M	1034/1624-25 開始
41	17	Ḥāǧī Yūnos	M	1073/1662-63
42	17	Faṭḥ	M	987/1579-80
43	17	Bābā Qāsem	Md	725/1324-25
44	17	Šafī'īye	Md	1067/1656-57
45	17	Šahšahān*	Md	850/1446-47 より前
46	17	Dardašt*	Md	サファヴィー朝以前？
47	17	Darb-e Emām	I	857/1453
48	17	Šūrī	I	919/1513-14 より前
49	B-2	Mostowfī*	M	981/1573-74
50	B-2	Ḥāǧī Manūčehr	M	1072/1661-62 より前
51	B-2	Šāh Zeyd	I	994/1585-86

支配者	建設者	Chardin	参考資料
ソレイマーン	Ṣafīqolī	×	H：859 M：440-441
アブー・サイード(イルハン朝)	アブー・サイード・ハーン	×	H：293-295 G：44-46 M：50
マリクシャー(セルジューク朝)	マリクシャー	○	H：67-168 G：20-26 M：527-590
サフィー	Ḥāǧī Yār Beyg Ṣabbāġ（染物師）	×	H：541-543 M：51-53
シャールフ(ティームール朝)	Šāh ʻAlā al-Dīn Moḥammad	○	M：54 H：333-341
アッバース 1	Nūr al-Dīn Moḥammad Eṣfahānī（織工）	○	H：501-504 M：513-516
アッバース 2	Ḥāǧī Yūnos（宦官）	×	H：611-612 M：602-604
モハンマド	Abū al-Futūḥ Moḥammad	×	H：612 M：719-720
アブー・サイード(イルハン朝)	Soleymān Abī al-Ḥasan Dāmġānī	△	H：302-310 G：37 M：433-440
アッバース 2	Moḥammad Šafī b. Ǧamāl al-Dīn Moḥammad Xūzānī	×	H：589-592 M：472-475
シャールフ(ティームール朝)	Šāh ʻAlā al-Dīn Moḥammad	×	G：150-151 M：45
?	?	×	H：318-319 M：45
ジャハーンシャー（黒羊朝）	Lala Ṣafaršāh (dārūġe)	×	H：341-353 G：47-57 M：765-772
?	?	×	H：862-863 M：776
タフマースプ	Mirzā Šokrallāh Mostowfī	×	M：54
?	?	×	H：730 M：599-600
モハンマド	?	○	M：773-775

番号	地区	建　物　名	種類	建　設　年
52	B-3	Qoṭbīye	M	950/1543-44
53	B-3	Lonbān	M	サファヴィー朝以前 1080/1669-70 修復
54	B-3	Ebrāhīm	I	?
55	B-3	Ǧāmi'-e 'Abbāsābād	M	11cA. H. /16c 末～17cA. D.
56	B-3	Sittī Fāteme	I	?

（注）1. 地区番号は本文中の各地区の番号に対応する。数字の前にBがつくのは郊外の番号。
2. 建築物の種類はM：モスク，Md：マドラサ，I：イマームザーデを表わす。
3. 建設年は特に注記しない限り完成の年を示す。
4. 支配者名のうち王朝名が付されていないものは全てサファヴィー朝の王名。
5. Chardin の項の○はChardin に記述があること，×は記述がないこと，△ははっきりと

出仕している者の館と，ウラマー，商人など王朝権力と密接な関係を持たない者の館に分類して示す。一部重複や記述の不明瞭な点があり，正確な数字を挙げにくいところがあるので[36]，4邸以上を○，2～3邸を△，0～1邸を×で示している。この3つの表から，イスファハーンという都市の発展とその社会，政治権力との関係について興味深い事実がいくつか浮がび上がってくる。

第一に，イスファハーンにおける建設事業は，この町に都を遷したアッバース1世の時代だけにとどまらず，むしろそれ以後さらに活発に展開されていることが指摘できよう。表4と表5はこのことを如実に示している。建築事業は，王朝の最後まで衰えを見せなかったのである。一般に，17世紀後半から18世紀初めは，サファヴィー朝の衰退期とされているが，こと都市における建築に限ってはそのような傾向はほとんど見られない。このことはサファヴィー朝後期の歴史を考える際に留意すべきことだろう。

第二には，遷都後にこのような宗教建造物の建築を命じた人物は，アッバース1世を除けば王はおらず，ほとんどが宮廷の王女，宦官か市井の商人，職人

支配者	建設者	Chardin	参考資料
タフマースプ	Qoṭb al-Dīn ʻAlī Bāb al-Daštī	×	H：380-383 M：720-722
? (ソレイマーン)	?	○	H：626-630 M：723-724
?	?	×	M：741
アッバース 1(?)	?	×	M：56
?	?	○	G：129-131 M：772-773

確定は出来ないがそれらしき建物についての言及があることを示している。

6. 参考資料のうち Hは Honarfar, Mは Mehrābādī, Gは Godard, A., "Iṣfahān", *Athār-é Īrān*, 2, 1937を示す。
7. 建物名に＊が付されたものは今日消失した建物を示す。

などだったということが挙げられよう。年代記に現れるような「有名人」の名は，アッバース2世の宰相だった Sārū Taqī[37] 位しか見られない。特にトルコ系遊牧民の武将の名が全くないことは示唆的である。この表を見る限り，イスファハーンにおいては，Allen がティームール朝時代のヘラートについて指摘したようなアミール層と宗教勢力との結び付き[38]は見られない。宗教建築物のほとんどは，ワクフ対象物件だったと考えられるが，トルコ系遊牧民の武将たちの財産は，都市における宗教建築にはほとんど投資されなかったのである。このことは，サファヴィー朝時代の遊牧民系支配者と都市との関係に一定の限界があったことを示していると言えよう。

表3,4からは，これら宗教建築物の建設者の意図もある程度窺い知ることができる。宮廷の王女，宦官の場合は子孫に財産を残すためにワクフ寄進を行なったとは考えにくい。親戚，縁者の少ない彼らは，ほぼ間違いなく，自らの死後の安寧を考え，モスク，マドラサなどの宗教建築物を作ってムスリムとしての義務を果たし，死後はそこに葬られることを願っただろう。一方，市井の商

表 4　Chardin 以後のサファ

番号	地　区	建　物　名	種　類	建　設　年
1	8	Īlčī	M	1097/1685-86
2	8	Aḥmadābād	Md	1114/1702-03
3	15	Nīmāvard	Md	1105/1693-94以後
4	17	Kāse Gerān	Md	1105/1693-94
5	17	Nūrīye	Md	11c後半～12c初/ 17c末～18c初
6	B-1	Čahār Bāġ(Mādar-e Šāh)	Md	1126/1714-15
7	B-2	Xān	M	1090/1679-80
8	B-2	Almasīye	Md	1104/1692-93
9	B-2	Maryam Beygom	Md	1115/1703-04
10	B-3	Āqā Kamāl Xāzen	Md	1108/1696-97
11	B-4	Šamsābād	Md	1125/1713-14
12	B-13	Mīrzā Ḥoseyn	Md	1099/1687-88
13	?	Āqā Mobārak	Md	1105/1693-94
14	?	Naǧafqolī Beyg	Md	1104/1692-93

ヴィー朝期主要宗教建造物

支配者	建設者	参考資料
ソレイマーン	Ṣāheb Solṭān Beygom bt. Ḥakīm al-Molk Īlčī	H：643-645 M：518-523 G：154-155
ソルターン・ホセイン	Ǧalāl al-Dīn Moḥammad（宮廷奥医師）	M：432-433
ソレイマーン ソルターン・ホセイン	Zaynab Beygom（4の建設者の妻）	M：504-508
ソレイマーン	Amīr Moḥammad Mahdī Ḥakīm al-Molk Ardestānī	H：602-605 M：482-493
ソレイマーン ソルターン・ホセイン	Nūr al-Dīn Moḥammad Ǧāberī Anṣārī	H：860 M：503-504
ソルターン・ホセイン	ソルターン・ホセインの母	H：685-722 G：155-159 M：444-469
ソレイマーン	Šeyx ʻAlī Xān Zangne（ワジール）	M：610-612
ソレイマーン	Ḥāǧī al-Mās（宮廷のゴラーム）	M：46
ソルターン・ホセイン	Maryam Beygom（王女）	H：662-667 M：30-34
ソルターン・ホセイン	Āqā Kamāl（王のハラムの財務官）	M：28-29
ソルターン・ホセイン	Mīrzā Moḥammad Mahdī（アッバーサーバードの商人）	H：684 M：475
ソレイマーン	Mīrzā Ḥoseyn b. Mīrzā ʻAlī Reḍā	M：500-502
ソレイマーン	Āqā Mobārak（宦官）	M：28
ソレイマーン	Naǧafqolī Beyg（nāẓer）	M：40

表 5　イスファハーン各地区の館数

地　区	宮廷関係者の館	それ以外の者の館						
			11	×	×	B- 4	×	×
1	△	×	12	×	×	B- 5	△	×
2	○	×	13	×	×	B- 6	×	×
3	△	×	14	△	△	B- 8	×	×
5	○	×	15	○	△	B- 9	×	×
6	×	×	16	△	×	B-10	×	×
7	○	○	17	○	○	B-11	×	×
8	△	×	B-1	○	×	B-12	×	×
9	△	△	B-2	○	×	B-13	△	×
10	△	△	B-3	○	○			

注：市内の宮廷地区④城塞⑱，郊外の Sa'ādat-e 'Abbās 地区（B-7）は居住地区ではないため除外している。

人，職人の場合は，財産の保持，現世における名誉，名声などが動機の主要なものだったと考えられる。イスファハーンの町は，このような個人の様々な意図を反映した多くの宗教建築物とそれに寄進されたキャラヴァンサライ，バーザール，ハンマームなどの営利施設によって飾られ，活気づいていたのである。

第三に，建造年代に地区別の偏りが見て取れよう。南西のいわゆる新市街地区の建物が，おおむね17世紀に入ってからのものであるのに対して，旧市街の中心である⑰の Dardašt 地区には，金曜モスクをはじめとして 16 世紀以前に建築された古い建造物が多い。新市街がアッバース 1 世による遷都後に発展したこと，元来のイスファハーン市街が古広場や⑰の地区を中心としていたことを考慮すれば，当然の結果だともいえよう。しかし，このことは 17 世紀になってから⑰の地区が衰退したことを意味するわけではない。むしろ，この地区に 17 世紀に入って建てられた建物の多く（表 3 の 38, 40, 44, 表 4 の 5 など）が，宮廷とはほとんど関係のない人々によって建設されているということに注目せねばならない。また，Šahšahān 家，Ǧāberī Ansārī 家，Xūzānī 家など旧来からこの町の名家として知られている家にゆかりの建物も，この⑰の地区にあ

った[39]。Šahšahān家の屋敷の横に建てられていたこの家の事実上の祖であるŠāh ʻAlā al-Dīn Moḥammadの墓廟は，一種の聖者廟として庶民の信仰を集めていた。サファヴィー朝宮廷が作り出した新市街から離れ，王朝権力に大きく影響されることなく，旧来からのイスファハーンの市民生活は営まれていたといえよう。Chardinによれば，アッバース1世は，イマーム・ホセインの血を引くŠahšahān家のイスファハーンにおける強大な影響力を恐れ，その当主を処刑しようとしたが，宗教学者をはじめとする人々の猛烈な反対で結局成功せず，次の王サフィーは王女をこの家に与えたという（Ⅷ，pp. 8-10)。この一件は王権と都市有力者との微妙な関係を伝えている。

第四の点は第三の点と関連する。Chardinによる館の分布を示す表4から明らかなように，政治的有力者の館は，市内の「王の広場」周辺と郊外のXāǧū，ʻAbbāsābād地区など市の南西部に多かった。王朝政治権力の中心が「王の広場」とこれに隣接する宮廷にあったためだろう。つまり，当時のイスファハーンは，古広場やDardašt地区を中心とし，旧来からこの町で生活してきた市民の住む旧市街と，王朝がこの町を首都と定めてから後にこの町に移り住んだり，王朝に仕えるために住む人々が生活する新市街とに大きく二分して考えることが出来るのである。Dardašt地区にも有力者の館はあったが，この地区の広さを考慮すれば，さほどの数とは言えない。むしろこの地区には，王朝政治権力に直接関わらない人々の館が多くあったことが目立っている。坂本氏が指摘しているように，19世紀のイスファハーンでは市街地が大幅に減少するが[38]，それはほとんど新市街の方だった。18世紀の前半にサファヴィー朝が滅亡し，王朝に依存していた人々が姿を消すと，新市街が荒廃して行くのは，サファヴィー朝時代のこの町の構造を考えれば当然だったのである。

おわりに

本稿では，主としてChardinの記録によりながら，17世紀後半のイスファハーンのトポグラフィーにかかわる問題を検討してきた。市壁の位置を決定し，市内，郊外各地区の位置を定め，その特徴をまとめた。これを基に17世紀後半のイスファハーン市の都市プランの全体像にも言及した。さらに，当時の建築物の具体的な位置や建設者についての考察から，王朝の首都イスファハーンの社会における人的，地理的な二重構造の存在を指摘した。その結果，東方イスラム世界の都市の代表例としてのイスファハーンの地誌がある程度明らかになったものと考える。また，これらの検討の過程で，史料としてChardinを扱う場合の問題点についても言及することが出来た。しかし，今回はまだ検討が十分ではなかったり，扱いきれなかった問題もある。それら当面の課題を最後にまとめて述べて結びとしたい。

1つは，具体的な商業，流通のシステムと都市プランの関係についてである。宗教施設や邸宅は地区別にある程度数量的に把握出来たが，今回は，バーザール，キャラヴァンサライなど商業，流通のための施設については同様の検討を見合わせた。かなり長期に亙って存在しうる宗教施設に対して，商業，流通のための施設は盛衰が激しく，17世紀から今日に至るまで変化せずに残っているものの数は非常に少ない。そのため，宗教施設のように簡単にはChardinの記述を確認できなかったからである。しかし，Gaube-Wirthの研究や彼らの書に収録されている当時のイスファハーンのキャラヴァンサライを一覧した史料，それに1923/24年の地図などを利用すれば，バーザールやキャラヴァンサライの具体的な位置や分布，取り扱い商品をある程度知ることも可能である。これによって，市内，郊外各地区の性格がなお一層明らかになろうし，都市イスファハーンと外部世界を結ぶ交易，流通の具体的な様相をも把握することが

出来よう。

各建築物のワクフ文書を詳細に検討することも今後の課題である。これにより，都市内外の施設同士のつながりや都市と周辺村落との関係について，さらに詳しく正確なデータを入手することが出来よう。上では概括的にしか述べることの出来なかった建築者の意図を明確に知ることも場合によっては可能になる[41]。

⑰のDardašt地区に集中していた名家の人々による建造物とその周囲の街区や住民との関連を調べてみることも興味深いだろう。名家と都市社会との関わり方をさらに詳しく分析できるかもしれない。

Chardin以外の欧文史料によって本稿の記述を補うことも必要だろう。

本稿によって，17世紀後半における都市イスファハーンの見取り図はある程度描くことが出来たので，今後はこれをもとにさらに都市社会そのものを分析するための作業を続けて行くことにしたい。

1 坂本勉「十九世紀イスファハーンの都市構成とメイダーン (I)～(III)」『史学』50-51，1980-81.

2 羽田正，三浦徹編『イスラム都市研究』東京大学出版会，1991，pp. 228—233.

3 Allen, T., *A Catalogue of Timurid Herat*, Cambridge, Mass., 1981, id., *Timurid Herat*, Wiesbaden, 1983.

4 Chardin のテキスト本文並びに Kroell, A., "Douze lettres de Jean Chardin", *Journal Asiatique*, CCLXX, 1982 を参考にして作成。

5 Chardin, Ⅶ, pp. 287-289.

6 *Voyages de Monsieur le Chevalier Chardin, en Perse, et autres lieux de l'Orient*, 3 vols., Amsterdam, 1711. Langlès 校訂本は，Le couronnement de Soleïman, troisième roi de Perse をも含む。また，校訂者による補足，脚注が数多く挿入されている。但し，少なくともイスファハーンの記述に関しては，テキストの本文自体には，さほど大きな違いはないように見受けられる。

7 坂本勉上掲論文（Ⅰ），p. 371.

8 Šafaqī, S., *Ǧoġrafiyā-ye Eṣfahān*, Eṣfahān, 1353/1974-75, p. 210.

9 Gaube, H. & Wirth, E., *Der Bazar von Isfahan*, Wiesbaden, 1978, pp. 31-

49. Quiring-Zoche, R., *Isfahan im 15. und 16. Jahrhundert*, Freiburg, 1980, p. 200.

10 Gaube & Wirth, p. 34.

11 Schafaghi, S., "Buildung von Stadtvierteln in Eṣfahān", G. Schweizer (ed.), *Interdisziplinäre Iran-Forschung: Beiträge aus Kultgeographie, Ethnologie, Soziologie und Neuerer Geschichte*, Wiesbaden, 1979, pp. 172-173. この論文では Ḥoseynābād となっているが，これは Ḥasanābād の誤りだろう。

12 例えば，Sārū Taqī よる一連の建造物 (Chardin, Ⅶ, p. 302)，イマームザーデアフマド (p. 320) など。

13 この門が大通りの始点となっていたことに関しては，Eskander Monšī, *Tārīx-e 'ālam ārā-ye 'abbāsī*, ed. I. Afšār, Tehran, 1350, p. 544, 羽田正「メイダーンとバーグ——シャー・アッバースの都市計画再考——」『橘女子大学研究紀要』14 (1987), p. 189.

14 Gaube & Wirth, p. 34.

15 Mehrābādī, p. 262.

16 但し，Chardin も記しているように，市壁は所々で崩れ，必ずしも全て残っていたわけではない。Eskandar Monšī は，1612年，ウズベクのハーンを迎えたアッバース1世が，ハーンの一行がイスファハーンの町の門に着いたときに，門を一時的に閉じ，小路 (kūče)，バーザールから市内に導き入れたことを伝えている (p. 736)。壁が崩れていた明白な証拠といえよう。

17 Mīrzā Ḥoseyn Xān, *Ǧoġrāfiyā-ye Eṣfahān*, Tehran, 1342, p. 31.

18 坂本氏は Coste に従ってサファヴィー朝時代に大市壁が築かれたとしている。坂本勉上掲論文 (Ⅰ), p. 370.

19 ただし Lockhart の研究を読む限り，18世紀初めのサファヴィー朝滅亡時にも大市壁の存在は認められない (*The Fall of Ṣafavī Dynasty and the Afghan Occupation of Persia*, Cambridge, 1958, pp. 149-170, 473-485)。なお同書 475 頁の地図には市街地を囲む壁のようなものが描かれているが，これは Lockhart の想像上の産物で根拠に乏しく不正確である。

20 このモスクのことを，Chardin は "la mosquée du grand pontife" または "fathé alla" モスクと記している。これまでの研究者 (例えば Godard, Gaube-Wirth など) はなぜかこのことに触れていないが，今日のモスク名となぜ異なっているのか不明である。

21 元来は，アッバース1世の Ǧārčībāšī によって建設された邸宅だった (1610年建

設)。その後，建主は王の不興を買いその邸宅は王に没収されたという。王はイギリス人の要請で手持ちの邸宅のうちからこの邸を彼らに貸し与えた (Chardin, pp. 403-404)。今日この邸宅はもはや存在しないが，Ǧarčībāšī のモスクとキャラヴァンサライはこの地区に残っている (Gaube-Wirth, pp. 196-197)。邸宅もこの付近にあったことは間違いあるまい。

22 今日の街区表では，Karrān と記されているが，ここでは1923/24年の地図の表記である Kahrān を採る。

23 Chardin によると，この地区は，3本の道と7つのキャラヴァンサライから成っていた。これらのキャラヴァンサライは，そこで働く女性の特徴から「ヴェールなしのキャラヴァンサライ (kārvānsarāyī-ye bī-naqqābān)」と呼ばれた。税を支払っているこの種の女性だけで，イスファハーンに1万2千人 (Ⅶ, pp. 416-417) ないし，1万4千人 (Ⅱ, p. 211) がいたという。彼女たちはギルド (corps) を作り，その長や役員も定められていた。多少の誇張はあろうが，売春が公認で，しかも盛んに行なわれていたことが分かる。このような悪所を仕事場にしている女性以外に，自宅を持ちそこで営業するより高級な娼婦もいた。Chardin が1675年から76年にかけて住んだ家の先住者もそのような女性だった。この種の女性は税を支払ってはいなかった。公の売春ではなかったからだが，見付かれば厳しい追徴金が課されたという。また，複数の女性を働かせる遊郭の女将のような存在もいた (Ⅶ, pp. 412-415)。Chardin は，女奴隷を買うこと，複数の妻を持つことが宗教的に許されているこの国で，女性の値段が極端に高いことを驚きを込めて書き残している (Ⅱ, pp. 211-217)。

24 坂本勉前掲論文 (Ⅰ), pp. 380-381.

25 Chardin は Bābā Qāsem (Baba Kasem) の墓がこの地区にあったことを伝えるが (Ⅶ, p. 468)，今日に残るこの人物の墓は，金曜モスクの北にあり，次の⑰ Dardašt 区に含まれる。Chardin の記述はここでも若干混乱している。

26 Quiring-Zoche, R., *Isfahan im 15. und 16. Jahrhundert*, Freiburg, 1980, pp. 169-174.

27 Ibid., pp. 38, 210.

28 Ibid., p. 210.

29 坂本勉前掲論文 (Ⅰ), pp. 375-381, 385-386.

30 Chardin は，しばしば dārūġe のことをフランス語で grand prévot と訳している (例えば Ⅸ, pp. 480, 567など)。一方，別の箇所では，gouverneur de la ville とも説明している (Ⅴ, p. 259, Ⅶ, p. 319)。それだけなら，単に表現の違いとも考

えられるが，イスファハーンの町の描写の中で，Ḥasanābād 地区に dārūġe の屋敷があるとしながら（Ⅶ，p. 319），'Abbāsābād 地区に grand prévot d'Ispahan 邸があるとも記している（Ⅷ，p. 70）。町の長官が二人いたとは考えにくいので，これらの記述による限り，dārūġe と grand prévot は別の職とせねばならない。このように，dārūġe に関する彼の報告は曖昧である。また，kalāntar は les prévots de ville と説明されている（Ⅵ，p. 79）。これを文字通りとると，kalāntar は複数いて，しかも dārūġe の手下であったことになろう。しかし，また彼は，kalāntar のことを maire（市長）（Ⅵ，p. 29）や grand prévot（本稿 203 頁）とも言い換えている。これらの説明では，dārūġe と kalāntar という語のそれぞれの定義，相互の関係などは不明とせざるをえない。

31　羽田正・三浦徹編『イスラム都市研究』，pp. 242–243.

32　この有名なアルメニア人居住区については，多くの文献があるが，さしあたって Gregorian, V., "Minorities of Isfahan: the Armenian Community of Isfahan 1587–1722", *Iranian Studies*, Ⅶ-3·4, 1974 を参照。また，Höltzer, E., *Īrān dar yek-ṣad o sīzdah sāl-e pīš* (*Persien vor 113 Jahren*), *baxs-e naxost; Eṣfahan*, Tehran, 2535/1976–77 は，19世紀後半にジョルファーに滞在したドイツ人が撮影した写真集で，ジョルファーを中心に当時のイスファハーンの風景が鮮明な写真に収められており，興味深い。

33　このような遊牧民の建設した都市の系譜については，羽田正「「牧地都市」と「墓廟都市」—東方イスラム世界における遊牧政権と都市建設」『東洋史研究』 49–1, 1990参照。

34　19世紀の史料である Ǧoġrāfiyā-ye Eṣfahān は，サファヴィー朝後期の戸数を20万戸と伝える(p. 31)。どちらを正しいとすべきか速断できないが，ここではより具体的な数字を挙げている Chardin に一応従っておく。

35　Dounton, M. J., "Towns and Economic Growth in 18th Century England", in Abrams, P., & Rigley, E. A. W. (eds.), *Towns in Societies*, London, 1978, p. 247. 文献の所在は井野瀬久美恵氏の御教示による。

36　ただ単に「数軒の邸宅」などと記されている場合がある。このような場合は，4邸以上を想定した。また，「かつて某の邸宅であった」とだけ書かれ，Chardin の時代の邸宅の主について触れていない場合もある。この場合は原則として勘定には入れていない。

37　Sārū Taqī とその波乱に富んだ生涯については，Chardin が詳しく記している（Ⅶ，pp. 302–318）。

38 Allen, T., *Timurid Herat*, Wiesbaden, 1983及び安藤志朗によるその書評(『東洋史研究』44-4)。

39 表3の39, 44, 45, 表4の5。

40 坂本勉前掲論文(I), pp. 375-379.

41 イスファハーンにおけるワクフの概要を知るには, Sepantā, A., *Tārīxče-ye awqāf-e Eṣfahān*, Esfahān, 1346/1967-68 が参考になる。